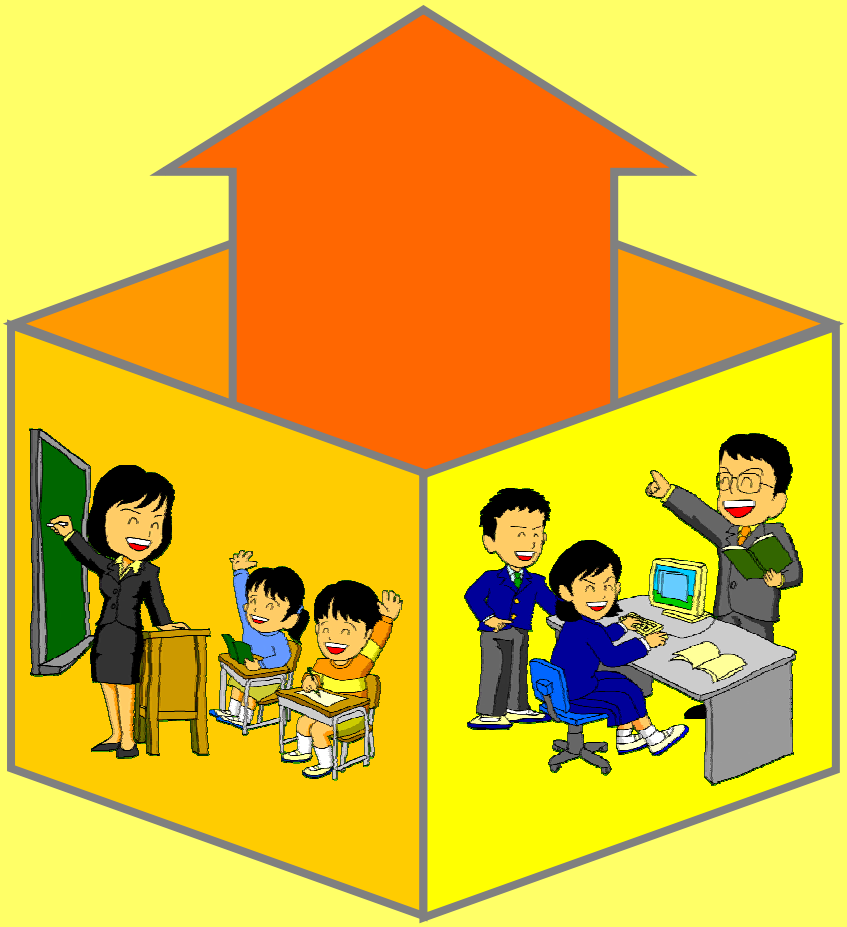
神奈川県

# 神奈川版
# 「読解力」向上のための
# ガイドブック



平成19年3月

神奈川県立総合教育センター

# はじめに

近年、国際的な学力調査の一つとして、OECDによる「PISA調査」(「生徒の学習到達度調査」)が実施されるようになりました。平成12年から始まったこの調査において、「Reading Literacy」(「読解力」)という言葉が使われるようになり、平成15年実施の同調査では、我が国の子どもの「読解力」の得点がOECD平均程度まで低下している状況にある等、大きな課題が示されました。

このような中、平成17年12月には文部科学省が「読解力向上に関する指導資料」を公表しました。その中で、「PISA調査のねらいとするところは、現行学習指導要領で子どもに身に付けさせたいと考えている資質・能力と相通じるもの」であるとしています。さらに、「読解力」は「学校の教育活動全体で身に付けていくべきものであり、教科等の枠を超えた共通理解と取組の推進が重要である」としています。

また、これからの教育に向けた平成18年２月の中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「審議経過報告」においても、「読解力」が取り上げられています。

こうした状況を踏まえ、当センターでは、平成18年度研究事業として「読解力」に関する研究に取り組み、「読解力」について実態に応じて実践的に整理しました。そして、「読解力」向上に取り組むための具体的な方法として、第一に、「読解力」に関するスキルを整理しました。第二に、学校の教育活動全体を構造的にとらえ直し、学校の教育活動全体で取り組むための具体的なコンセプトモデルを作成しました。第三に、新たな学習指導案のフォーマットを作成し、それによる教科等の学習指導案を作成しました。そして、こうした研究の成果について、学校全体で取り組むための方法を掲載したガイドブックとしてここにまとめました。

このガイドブックで取り上げた内容は一つのモデルではありますが、各学校における「読解力」向上のための実践の一助として御活用ください。

平成19年３月

神奈川県立総合教育センター

所　長　　田　邊　克　彦

# 目　　次


はじめに

目次

ガイドブックの構成

第１章　「読解力」とは ---------- １

◆「読解力」の定義◆ ---------- ３

１　ＰＩＳＡ調査 ---------- ３

２　文部科学省　「読解力」向上 ---------- ８

３　神奈川版 ---------- 11

■今、なぜ「読解力」向上なのか？■ ---------- 15

参考資料 ---------- 16

第２章　「読解力」向上のために ---------- 17

第２章－１　「読解力」向上と教科等の学習のために ---------- 18

１　スキルの整理とトレーニングの必要性 ---------- 18

２　スキルモデル ---------- 22

参考資料 ---------- 28

**第２章－２　学校の教育活動全体で取り組むために** ---------- 32

１　学校の教育活動の構造化 ---------- 32

２　教科等の学習と新たなフォーマット ---------- 34

３　学習機会の充実 ---------- 38

**第３章　各学校で取り組む際に** ---------- 43

１　作成の手順 ---------- 44

２　「読解力」の評価 ---------- 46

参考資料 ---------- 47

**【学習指導案編】** ---------- 57

例）中学校社会 ---------- 60

CD－ROM 収録

**＜小学校＞**

「国語」「社会」「算数」「理科」「生活」「音楽」
「図画工作」「家庭」「体育」「総合的な学習の時間」

**＜中学校＞**

「国語」「社会」「数学」「理科」「音楽」
「美術」「保健体育」
「技術・家庭（技術）」「技術・家庭（家庭）」
「外国語（英語）」「総合的な学習の時間」

**作成関係者**

# ガイドブックの構成

神奈川県立総合教育センターでは平成 18 年度「読解力」向上に関する研究として、次のような内容に取り組みました。

１　「読解力」について実態に応じて実践的に整理する。

２　「読解力」向上に取り組むための具体的な方法を考える。

①　スキルを整理する。　②　学校の教育活動全体を構造的にとらえ直す。

３　「読解力」とスキルを位置付けた、教科等における具体的な学習指導案を作成する。

本冊子は、これらの成果をまとめたもので、次のような内容からなっています。

**◆第１章**　**＜神奈川版＞**

○「読解力」をどのようにとらえるかということについて、PISA 型「読解力」及び文部科学省の指導資料等を踏まえて、説明しています。

**◆第２章**　**スキル、＜三つのＳ＞、新たなフォーマット**

○「読解力」向上に取り組むための具体的な二つの方法について説明しています。

①第２章―１では、「読解力」向上と教科等の学習目標達成のための方法として、「スキル」について説明しています。

②第２章―２では、学校の教育活動全体で取り組むための方法として、「三つのＳ」について説明しています。

○また、教科等の学習で取り組む際の学習指導案の新たなフォーマット（書式）について説明しています。

**◆第３章**　**作成の手順と評価**

○各学校で、実際に取り組む際の手順と「読解力」の評価について説明しています。

**◆学習指導案編**

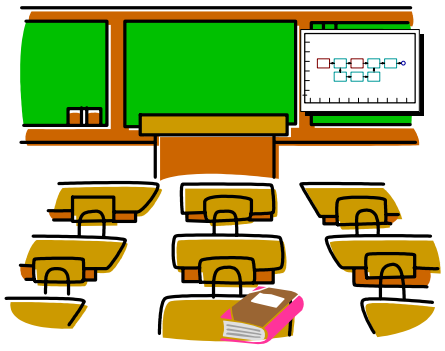
○「読解力」とそのスキルを位置付けた学習指導案の例を掲載しています。

※教科等の学習指導案は、CD－ROM に収録

○本冊子は、「読解力」向上のためのガイドブックであり、この中で「読解力」を柱の一つとしたカリキュラム・マネジメントのコンセプトモデルを示しています。

○本冊子を参考に、カリキュラム・マネジメントの観点から、「生きる力」の育成につながる「読解力」向上のための取組を各学校で実践してみましょう。

# 第１章
# 「読解力」とは



MEMO

## ★PISA調査★

○PISA 調査とは、OECD（Organisation for Economic Co-operation and Development：経済協力開発機構）の教育指標事業（INES: Indicators of Education Systems）の一環として実施している「生徒の学習到達度調査」（PISA：Programme for International Student Assessment）のことです。

○PISA 調査は、義務教育修了段階の 15 歳の生徒が持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかどうかを評価するものです。

○平成 12（2000）年に第１回の調査を実施し、以後３年ごとのサイクルで、三つの分野（読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー）を調査しています。各調査サイクルでは一つの主要分野を重点的に調べ、他の二つの分野については概括的な状況を調べています。

第１回：2000 年（「読解力（リーディングリテラシー）」中心）→結果は 2001 年公表
第２回：2003 年（「数学的リテラシー」中心。「問題解決能力」追加）→結果は 2004 年公表
第３回：2006 年（「科学的リテラシー」中心。）
第４回：2009 年予定

（『生きるための知識と技能』及び『生きるための知識と技能２』参照）

## ★文部科学省「読解力」向上に関する資料★

○文部科学省では、平成 15（2003）年 PISA 調査の結果の詳細な評価・分析が重要であると考えワーキンググループを設置し、平成 17 年１月には、結果の分析と改善の方向（中間まとめ）を示しました。PISA 型「読解力」については、更に詳細な分析及び検討を行い、平成 17 年に**「読解力向上プログラム」**を取りまとめました。その中で、今後は、子どもたちの PISA 型「読解力」の向上を図るため、各学校では、同時期に作成した**「読解力向上に関する指導資料」**や、作成する予定のハンドブック・事例集等を参考にしつつ、同プログラムで示した「３つの重点目標」に沿って授業改善に取り組むことが求められるとしています。

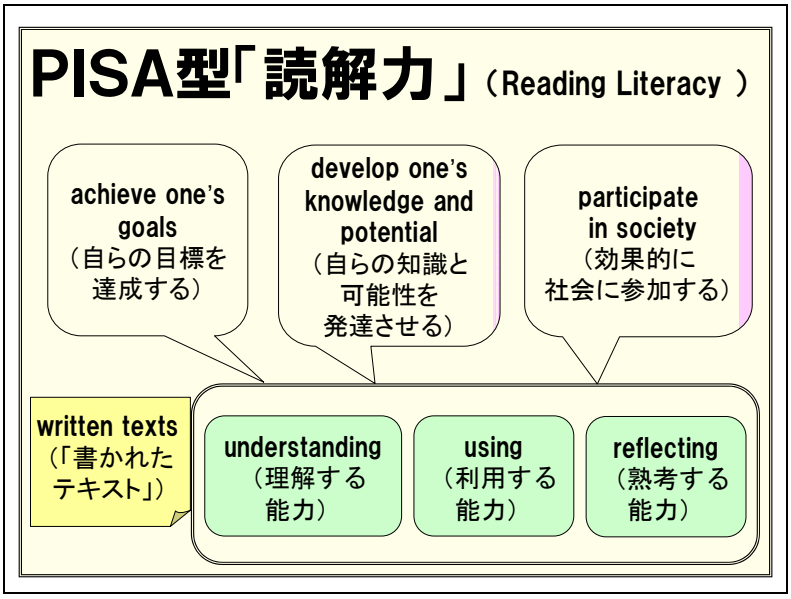
○「読解力向上に関する指導資料」は、調査結果から明らかになった課題から、PISA 調査における「読解力」の考え方を踏まえ、改善の具体的な方向を示し、それに基づいた「７つの能力の育成」を掲げるとともに、各教科等においてそれぞれの能力を育成するための具体的な指導例を示しています。

（「読解力向上プログラム」及び「読解力向上に関する指導資料」参照）

# 第１章

## ◆「読解力」の定義◆

○PISA 調査における「読解力」（「Reading Literacy」）は、“PISA 型「読解力」”と呼ばれ、次のように定義されています。（「OECD 版国際報告書（英語）」及び『生きるための知識と技能』より）




Reading literacy is understanding, using, and reflecting on written texts, in order to achieve one's goals, to develop one's knowledge and potential, and to participate in society.

［日本語訳］自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。

# １　ＰＩＳＡ調査

### ◆PISA 調査における三つの側面◆

○PISA 調査には、問題で扱う三つの側面というものがあります。

i　生徒が各分野で習得する必要がある知識の「内容」または「構成」
　→　「読解力」ではテキストの形式

ii　実行する必要があり様々な認知的技能（cognitive skills）が求められる幅広い「プロセス」
　→　「読解力」では読む行為のプロセス
　　①情報の取り出し　②テキストの解釈　③熟考・評価

iii　知識・技能の応用やそれが必要とされる「状況」
　→　「読解力」ではテキストが作成される用途、場面、状況

## (1)「テキスト」

○PISA 調査は、紙面での調査であるということから、“書かれたテキスト”を読む対象としています。テキストの形式については、大きく分けて ①**「連続型テキスト」**、②**「非連続型テキスト」**の二つがあります。

> ①**「連続型テキスト」**は、通常、文と段落から構成されたもので、物語、解説、記述、議論、指示、文書または記録などに分類されています。
> ②**「非連続型テキスト」**は、データを視覚的に表現した図・グラフ、表・マトリックス、技術的な説明などの図、地図、書式などに分類されています。

○なお、「『書かれたテキスト』とは、言語が用いられた印刷物、手書き文章、電子表示された文章などで、図、画像、地図、表、グラフなどの視覚的表現は含まれるが、映画、TV、アニメーション、言葉のない映像は含まれない。ただし、このうち電子テキストについては、時間と使用手段の都合から実際には使用していない。」としています。（『生きるための知識と技能２』p. 16 より）

○また、テキストが作成される用途、場面、状況としては、次の四つがあります。
①教育的　②職業的　③私的（個人）　④公的（公共）

**MEMO**

**★テキストの形式　その一：連続型★**　（『PISA 2003 年調査　評価の枠組み』p. 93 より）

■**物語**（Narration）は、情報が対象の時間的な特性に言及しているような形式のテキストである。物語形式のテキストは、典型的には「いつ」または「どのような順序で」といった質問に対する答えを提供する。
■**解説**（Exposition）は、複数の要素で構成された概念または精神的な構造物として情報が提示されているような形式のテキスト、あるいは概念や精神的な構造物がその中で分析できるような要素を持つテキストである。テキストは、構成要素が意味ある全体として、またしばしば「どのようにして」といった質問によって、いかに相互に関連するかを説明するものである。
■**記述**（Description）は、情報が空間に存在する事物の特性に言及するような形式のテキストである。記述的テキストは典型的には「何か」といった質問に対する答えを提供する。
■**議論**（Argumentation）は、概念間の関係についての命題、あるいは他の命題間の関係を示す形式のテキストである。論証的テキストはしばしば、「なぜ」といった質問に答えるものである。議論的テキストは、もう１つ重要な下位分類である説得的なテキストに分類される。
■**指示**（Instruction）（命令（injunction）と呼ばれることもある）は、何をなすべきかを指し示し、ある行動を特定する手順、規則、規範及び法令を含むような形式のテキストである。
■**文書または記録**（document or record）は、情報を標準化し、保存するように設計されたテキストである。きわめて形式化されたテキスト的特徴または形式的特徴によって特性づけられる。
■**ハイパーテキスト**（Hypertext）は、異なる配列で問題を読むことができることによって、読み手が様々な経路から情報に到達するような方法で、一連のテキストを結び付けたものである。

MEMO

## ★テキストの形式　その二：非連続型★

（『PISA 2003 年調査　評価の枠組み』pp. 94-95 より）

■**図・グラフ**（Charts and graphs）はデータを映像的に表現したものである。科学的論証のために用いられるとともに、雑誌や新聞で数字及び表にした公の情報を視覚的に示すために用いられる。

■**表・マトリックス**（Tables and matrices）。表は行と列からなるマトリックスである。典型的には、各列と各行に記入されるすべての項目が特性を共有しており、このため、列と行のラベルはテキストの情報構造の部分を形成している。一般的な表には、予定表、一覧表、注文票、索引などがある。

■**図**（Diagrams）は、しばしば技術的な説明（家庭用器具の部品を説明する場合など）や、解説及び説明のテキスト（家庭用器具の組み立て方法を図示する場合など）などで用いられる。しばしば、（ある物がどのように機能するかという）プロセスと（どのようにするかという）手順を区別して図示する際に有用である。

■**地図**（Maps）は、ある場所とある場所の地理的な関係を示す非連続型テキストである。地図には様々な種類がある。道路地図は、ある特定された場所と場所の間の距離や経路を示す。テーマ別地図は、ある場所と社会的状況あるいは自然との関係を示す。

■**書式**（Forms）は、構造化されフォーマットされたテキストであり、読み手に対して特定の質問に特定の方法で答えることを求める。書式は、多くの組織がデータを収集する際に用いており、構造化すなわちあらかじめコード化された回答様式となっていることが多い。典型的な例としては、納税用紙、入国管理用紙、査証申請用紙、申込用紙、統計用質問紙などである。

■**情報シート**（Information sheets）は、それによって情報を求めるというよりも、むしろ情報を提供するためのものであるという点で書式と異なる。情報シートは構造化された方法、及び読み手が容易にかつ迅速に特定の情報を確認できるようなフォーマットで情報を要約する。情報シートは、リスト、表、図、及び非常に複雑なテキストに基づく図表（見出し、フォント、インデント、枠など）だけでなく多種多様なテキストの書式によって、情報を要約したり強調したりする。時刻表、価格リスト、カタログ、プログラムなどはこの種の非連続型テキストの例である。

■**宣伝・広告**（Calls and advertisements）は、読み手に何かをするよう呼びかけるためにデザインされた文書で、例えば商品やサービスを購入したり、集会や会議に参加したり、選挙に行くことを呼びかけたりするものなどが含まれる。これらの文書の目的は、読み手をその気にさせることである。何かを誘ったり、注目すること及び行為することを求めているのである。広告、招待状、召喚状、警告、通告などはこの種の文書形式の例である。

■**バウチャー**（Vouchers）は、その所有者があるサービスを受ける権利があることを示すものである。そこに含まれる情報は、バウチャーが妥当であるか否かを示すのに十分でなければならない。典型的な例はチケットや請求書などである。

■**証明書**（Certificates）は、協定あるいは契約の妥当性を認定する書かれた文書である。それらは、形式よりもむしろ内容において形式化されている。与えられたステートメントが真実であることを証明する権限のある正当な者、１人以上のサインを必要としている。保証書、卒業証書、学位記、契約書などがこれらの特性を持つ文書である。

## (2)「読解力」

○PISA 調査では、次の三つの側面に分けて「読解力」を測定しています。

〔「読む行為」のプロセス（側面）〕

| | |
|---|---|
| ①**情報の取り出し** | … テキストに書かれている情報を正確に取り出すこと。 |
| ②**テキストの解釈** | … 書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり推論したりすること。 |
| ③**熟考・評価** | … テキストに書かれていることを知識や考え方や経験と結び付けること。 |

※なお、『PISA 2003 年調査　評価の枠組み』及び『生きるための知識と技能２』においては、「解釈」「熟考・評価」のそれぞれを更に二つに分け、全部で五つのプロセスとしていますが、結果の報告に当たっては先の三つのプロセスで行っています。

○出題の形式は次のようになっています。

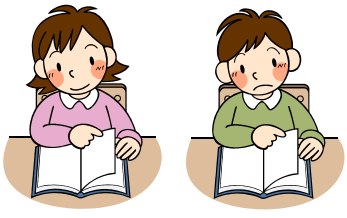
①多肢選択形式
②複合的多肢選択形式
③求答形式
④自由記述形式（⑤短答形式）

○なお、2000 年の公開問題の内容検討及び 2003 年の調査結果の分析から、読解のプロセスとしては「解釈」「熟考・評価」、出題形式としては「自由記述形式」に課題があり、具体的には次のような問題に課題がみられました。

①テキストの表現の仕方に着目する問題
②テキストを評価しながら読むことを必要とする問題
③テキストに基づいて自分の考えや理由を述べる問題
④テキストから読み取ったことを再構成する問題
⑤科学的な文章を読んだり、図やグラフをみて答える問題

○PISA 調査における「読解力」には、**「習熟度レベル（「習熟度」）**というものがあります。「読解力」を①情報の取り出し、②解釈、③熟考・評価という三つの側面について、それぞれの問題の難易度を基に得点をスケール化し、六つのレベルに分けたものです。

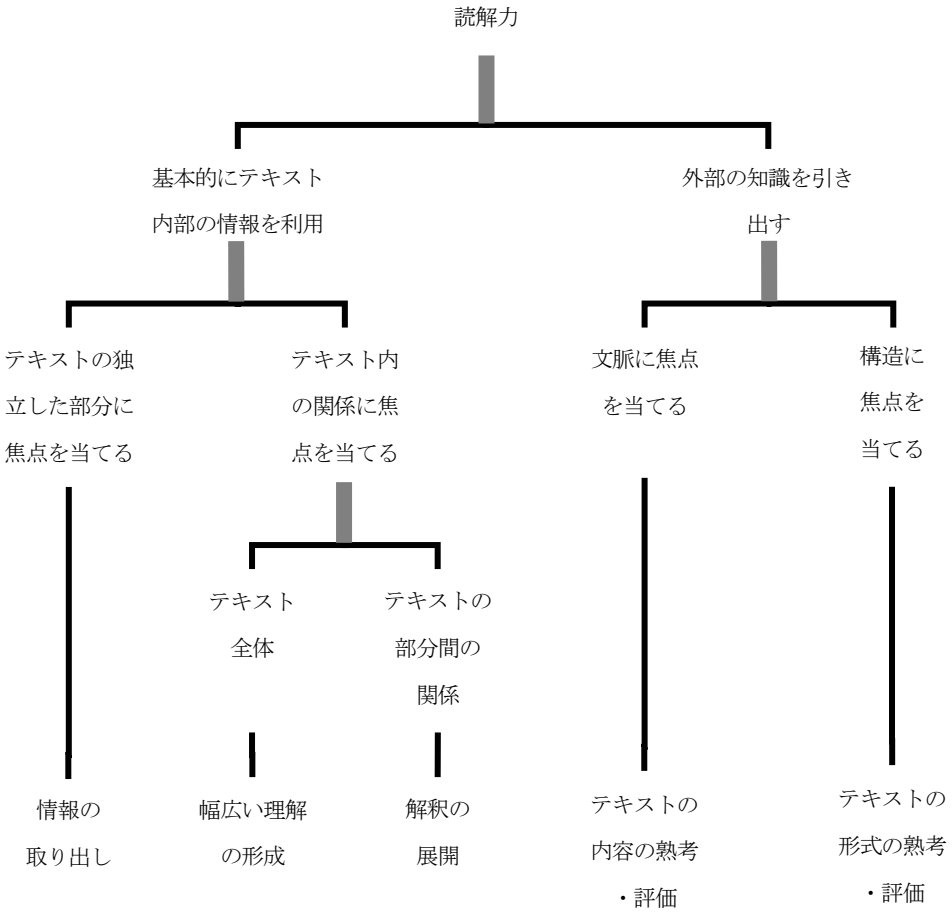
○六つのレベルとは５～１及び１未満です。（→ *詳細については、本冊子第３章へ*）



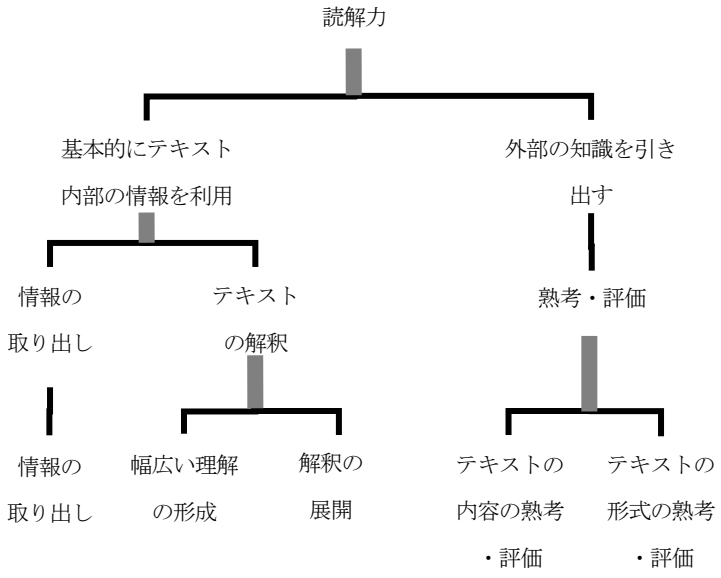
MEMO

## ★「読む行為」のプロセス（側面）★　（『PISA 2003 年調査　評価の枠組み』p. 97、p. 103 より）

■　読解力の５つのプロセス（側面）を区別する特徴（p. 97）



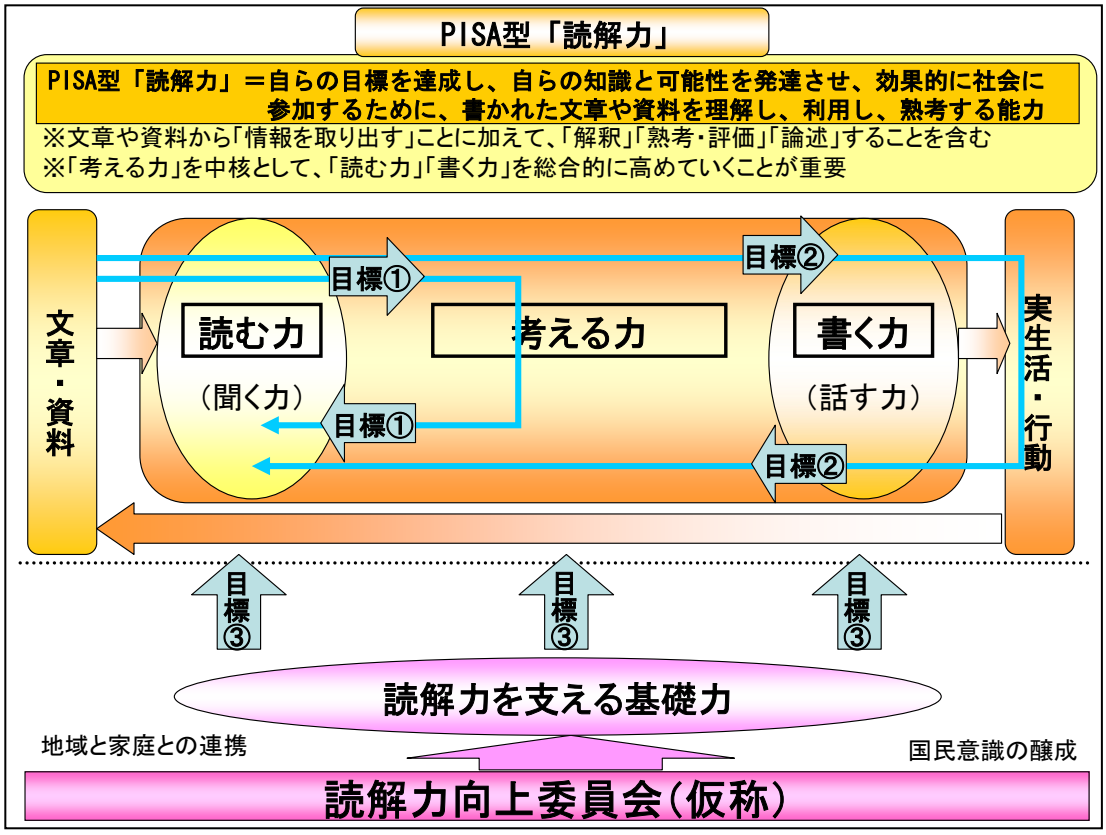

■　読解力の枠組みとプロセス（側面）の下位尺度との関係（p. 103）



# ２　文部科学省　「読解力」向上

## ◆「読解力」向上に関する資料◆

○文部科学省では、平成 17 年に**「読解力向上プログラム」**を取りまとめ、その中で次のような内容について説明しています。PISA 型「読解力」及びその調査結果についての分析、学校での取組「３つの重点目標」、国・教育委員会の取組「５つの重点戦略」。




**【学校での取組　～３つの重点目標～】**

目標①　テキストを理解・評価しながら「読む力」を高める取組の充実
　ｉテキストの内容や形式などの「解釈」や「理解・評価」する取組の充実
　ii 「建設的な批判を伴う読み（クリティカルリーディング）」の導入
目標②　テキストに基づいて自分の考えを「書く力」を高める取組の充実
　ｉテキストの内容を「要約」「紹介」する取組の充実
　ii 授業の最後に「自分の考えを簡潔に書かせる」などの機会の充実
　　（自分の考えをＡ４一枚程度で表現）
目標③　様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実
　ｉ「朝の読書」など読書活動の推進
　ii 新聞や科学雑誌などを含め、「幅広い読み物」に触れる機会の充実（NIE 活動など）
　iii 「目的に応じた自分の意見」を述べたり、書く機会の充実

（「読解力向上プログラムの全体像」より）

○同年公表された**「読解力向上に関する指導資料 ―PISA 調査（読解力）の結果分析と改善の方向―」**の中で、PISA 調査における「読解力」の考え方を踏まえ、指導のための三つの「改善の具体的な方向」を示し、それに基づいた「７つの能力の育成」を掲げています。（７つの「指導のねらい」）

**【指導のねらい】**

ア　テキストを理解・評価しながら「読む力」を高めること
（ア）目的に応じて理解し、解釈する能力の育成
（イ）評価しながら読む能力の育成
（ウ）課題に即応した読む能力の育成
イ　テキストに基づいて自分の考えを「書く力」を高めること
（ア）テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成
（イ）日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成
ウ　様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実すること
（ア）多様なテキストに対応した読む能力の育成
（イ）自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

（「読解力向上に関する指導資料」より）

## (1)「テキスト」

○文部科学省は、「読解力向上に関する指導資料」の中の「具体的な指導例」において、“書かれたテキスト”の他に、絵画資料、映像（映画、ドキュメンタリー番組）も含めており、PISA 調査よりも広い範囲のものを「テキスト」として取り上げています。（「読解力向上に関する指導資料」参照）

○文部科学省教育課程課／幼児教育課編集『初等教育資料』（平成 18 年 ５月号～７月号）では、教科等における「読解力の育成」として、各教科等における「テキスト」について説明しています。

（５月号：国語科、社会科、算数科、総合的な学習の時間　６月号：理科、生活科、音楽科、図画工作科
７月号：家庭科、体育科、道徳、特別活動）

この中で、各教科等での学習の対象となるものとして、「テキスト」とする対象を更に広げていることが分かります。例えば、社会科では「広義に解釈すれば、学習の対象となり得る社会的事象のすべてととらえることができる」としています。また、理科では「自然の事物・現象」、音楽科では「鳴り響く音楽自体」、生活科では「ススキの穂や紅葉した木の葉」「店主さんの表情や仕草」などを挙げています。（平成 18 年『初等教育資料』５月号～７月号参照）

## (2)「読解力」

○「読解力」とは、文章や資料から「情報を取り出す」ことに加え「解釈」「熟考・評価」「論述」することを含むものであり、「考える力」を中核として「読む力」「書く力」を総合的に高めていくことが重要であるとしています。また、「読む力」「書く力」の他に、「話す力」「聞く力」を含めています。（「読解力向上プログラム」参照）

○先に示したように、「読解力」について三つの「改善の具体的な方向」を示し、それに基づいた「７つの能力の育成」を挙げています。（「読解力向上に関する指導資料」参照）

MEMO

## ★改善の具体的な方向★　（文部科学省『読解力向上に関する指導資料』より）

教科国語を中心としつつ、各教科、総合的な学習の時間等を通じて、次のような方向で、改善の取組を行う必要がある。

### ①　テキストを理解・評価しながら読む力を高めること

読む力を高めるためには、テキストを肯定的にとらえて理解する(「情報の取り出し」)だけでなく、テキストの内容や筆者の意図などを解釈することが必要である。さらに、そのテキストについて、内容、形式や表現、信頼性や客観性、引用や数値の正確性、論理的な思考の確かさなどを理解・評価したり、自分の知識や経験と関連付けて建設的に批判したりするような読み(クリティカル・リーディング)を充実することも大切である。

特に、授業の中では、何のためにそのテキストを読むのか、読むことによってどういうことを目指すのかといった目的を明確にした指導が必要である。

すなわち、テキストを単に読むだけでなく、考える力と連動した形で読む力を高める取組を進めていくことが重要である。

### ②　テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること

読解に当たっては、単に読んで理解するだけでなく、テキストを利用して自分の考えを書くことが求められる。テキストの内容を要約・紹介したり、再構成したり、自分の知識や経験と関連付け意味付けたり、自分の意見を書いたり、論じさせたりするなどの機会を設けることが重要である。

特に「自由記述(論述)」に不慣れな生徒には、授業のまとめのときに、自分の考えを簡潔に書かせるなど日常的な授業の工夫が必要である。そして、こうした活動を踏まえて、自分の考えをＡ４一枚程度にまとめて表現するなどの活動を重視する必要がある。

すなわち、一方でテキストを読んで理解することによって得られた知識について、実生活や行動と関連付けて書く力を高めるとともに、他方で書いたものをさらに深めることを通じて読む力を高めることが期待される。このように、考える力を中核として、読む力、書く力を総合的に高めていくプロセスを確立することが重要である。

### ③　様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること

読むことについては、朝の読書の推進を含め、読書活動を更に推進することが求められる。その際、文学的文章だけでなく、新聞や科学雑誌などを含め、幅広い範疇の読み物に親しめるよう、ガイダンスを充実することが重要である。

授業の中で、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実することも求められる。その際、自分の経験や心情を叙述するだけでなく、目的や条件を明確にして自分なりの考えを述べたり、論理的・説明的な文章に対する自分なりの意見を書いたりするなどの機会を意図的に作っていくことも大切である。

また、家庭や地域に対して、読書や読み聞かせ、自分の思いや考えを話したり、書いたりする取組の大切さなどについて周知していくことも求められる。

# ３　神奈川版

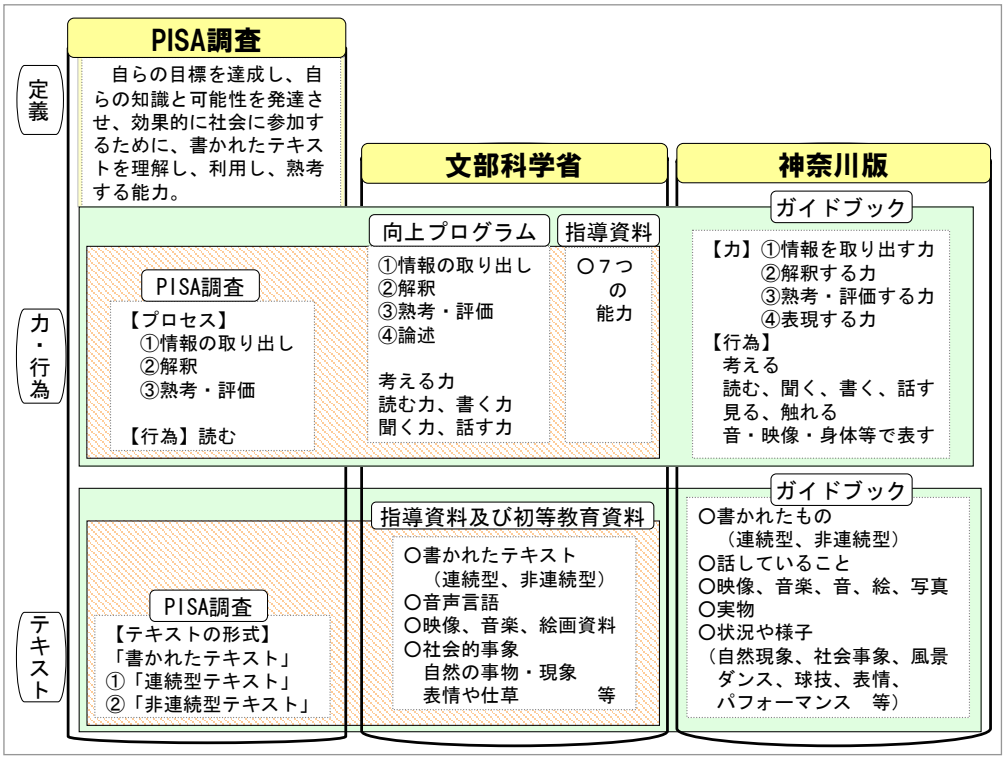
○これまで述べてきたPISA調査及び文部科学省の資料を踏まえ、学校の教育活動全体で「読解力」向上に取り組むに当たり、「テキスト」及び「読解力」について、＜神奈川版＞として次のように、実態に応じて実践的に整理しました。

○**「テキスト」について**は、児童・生徒が学習活動や実生活で直面するものには多種多様なものがあることから、“書かれたテキスト”を始め、教科等の学習活動において対象とするもの、更には実生活で対象とするものまで広くとらえて、「テキスト」として整理することにしました。

○**「読解力」に関する行為について**は、児童・生徒は学習活動や実生活において、多様な「テキスト」に応じて、「読む」以外にも様々な行為を行うことから、「読解力」に関する行為についても広くとらえることとしました。「読む」「聞く」「書く」「話す」に加えて、「見る」「触れる」、音・映像・身体等で「表す」等の多様な行為を含めています。

○**「読解力」向上に関して**は、PISA調査における「読む行為」のプロセス（側面）は三つですが、文部科学省「読解力向上プログラム」では、「論述」を加えた四つを挙げています。これらを踏まえ、読み取ったり考えたりしたことについて発信することを一つとし、その行為が多様であることから「表現する力」とし、＜神奈川版＞では「読解力」のための四つの力として整理しました。

なお、「読解力向上に関する指導資料」では、「７つの能力」を挙げていますが、これは三つの「改善の具体的な方向」に基づいています。この三つのうち、「読む力を高めること」「書く力を高めること」については、「読む行為」の三つのプロセスと「表現」に関するものであることから、＜神奈川版＞「四つの力」と対応するものとしてとらえました。そして、「機会を充実すること」についてはそのまま「機会の充実」として、「四つの力」とは別にとらえることにしました。




【神奈川版とPISA調査・文部科学省の資料との関係】

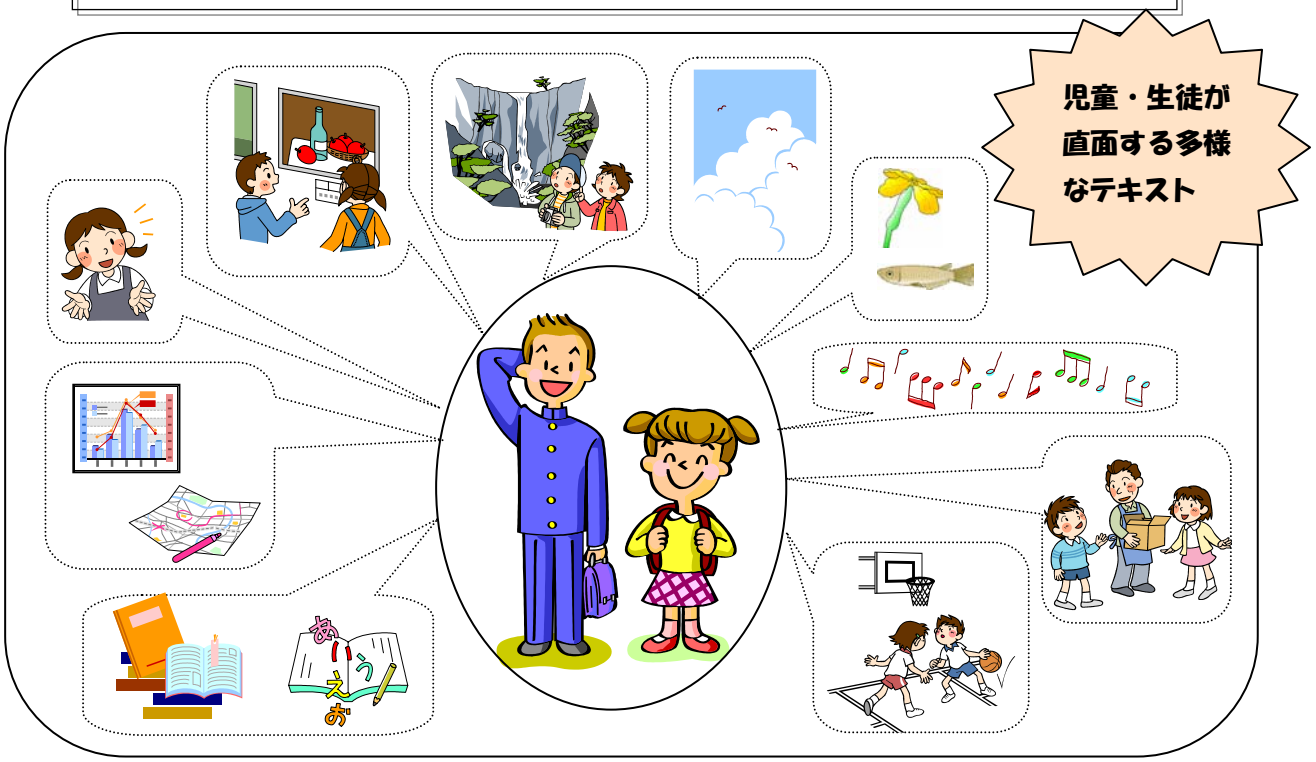
## (1)「テキスト」

○PISA 調査及び文部科学省の資料が対象としているテキスト以外にも、教科等の授業では様々なものが対象となります。実生活・実社会においても同様です。

○そこで、PISA 調査及び文部科学省の資料を踏まえ、＜神奈川版＞では「テキスト」の対象を広げ、次のように整理しました。

**＜神奈川版＞における「テキスト」**

○書かれたもの（連続型テキスト、非連続型テキスト）
［文字言語］
○話していること［音声言語］ 〔バーバル〕
○映像、音楽、音、絵、写真
○実物
○状況や様子（自然現象、社会事象、風景、ダンス、球技、
表情、パフォーマンス　等） 〔ノンバーバル〕




○実生活・実社会においてはあらゆるものから様々なことを感じ取ったり読み取ったりしますが、何を「テキスト」として、その「テキスト」のどのようなことについて、「読解力」を活用したのかという根拠を示す必要があります。

○また、教科等の学習においては、教科の学習内容に関するものが対象となります。

○こうしたことから、あらゆるものを「テキスト」にするということではなく、特に状況や様子などについては、教員や児童・生徒が切り取ったもの、まとまりのあるもの、文脈のあるものが対象ということになります。例えば、自然現象や話し合いでは、記録したり、まとめたりして、文字言語、絵、映像等により提示し、互いに示せるものを「テキスト」としてとらえることにしました。

## (2)「読解力」

○PISA 調査及び文部科学省の資料を踏まえ、「テキスト」の整理と併せ、＜神奈川版＞では「読解力」のための力として、次のように整理しました。

**＜神奈川版＞における「四つの力」**

①「テキスト」から情報を取り出す力

②「テキスト」を解釈する力

③「テキスト」について熟考・評価する力

④「テキスト」を基に自分の考えを表現する力

**【①「テキスト」から情報を取り出す力】**

○「テキスト」にある情報を正しく取り出す力です。「テキスト」の理解のためには欠かせない力です。

**【②「テキスト」を解釈する力】**

○「テキスト」にある情報の持つ意味について、「テキスト」全体から総合的に理解したり、推論したりして、解釈する力です。解釈する際の根拠は「テキスト」にある事柄となります。

**【③「テキスト」について熟考・評価する力】**

○解釈したことなどを基に、「テキスト」について、他のテキスト、知識、考え方、経験等を参考に、熟考・評価する力です。

○「テキスト」について吟味したり、クリティカル・リーディング（建設的な批判読み）をしたりすることを通して、内容だけでなく形式についても熟考・評価する力です。

**【④「テキスト」を基に自分の考えを表現する力】**

○「テキスト」について、取り出した情報、解釈したこと、熟考・評価したことについて、根拠を示して表現する力です。

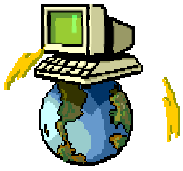
○なぜそのように考えたのかということについて自分の体験と結び付けて具体的に表現したり、なぜそのように言えるのかということについて根拠を明確にして表現したりする力です。

**【「四つの力」に関する行為】**

○多様な「テキスト」に応じて情報を取り出し、解釈する際には、「読む」「聞く」だけでなく「見る」「触れる」等の多様な行為があります。あわせて、表現する際にも、「書く」「話す」だけでなく、音・映像・身体等で「表す」等の様々な行為があります。

○そこで、＜神奈川版＞では、様々な行為を対象としています。

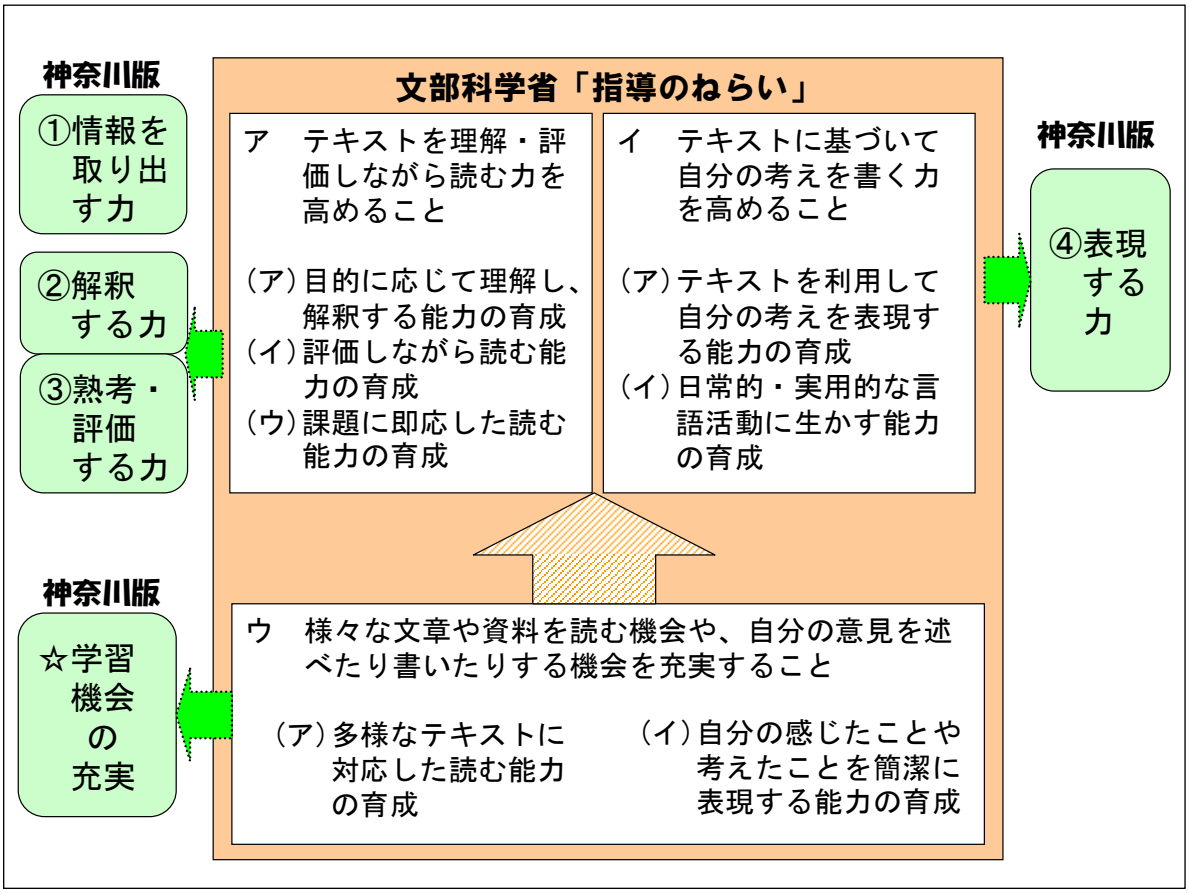
○ここまで見てきたように、＜神奈川版＞は、すべての教科に必要な基本的な能力としての「読解力」について、PISA 調査及び文部科学省の資料を踏まえながら、児童・生徒の学習活動や実生活・実社会という視点から整理したものです。このことは、児童・生徒がどの教科でも「読解力」に関して繰り返し学習したり、実践を積み重ねたりすることへとつながり、それにより確実な「読解力」向上へとつながっていきます。



○「読解力」は、学習活動や実生活・実社会において不可欠な力です。そして、国際化、情報化といった急激に変化している社会を生きる児童・生徒にとってはこれまで以上に求められる能力です。

○テキストから情報を正しく取り出したり、解釈したりする力だけでなく、特にテキストの内容・形式について熟考・評価する力、根拠を示して自分の考えを表現する力が求められます。何より、それらの中核である「考える力」の育成が求められます。

○「読解力」向上は、教科等の目標達成、「確かな学力」の向上、「生きる力」の育成のための一助となるものです。




【神奈川版と文部科学省「指導のねらい」との関係】

## 今、なぜ「読解力」向上なのか？

○平成 12 年に OECD が始めた PISA 調査において、「Reading Literacy」という言葉が使われ、“PISA 型「読解力」”と呼ばれるようになりました。

○平成 17 年の文部科学省「読解力向上プログラム」では、「読解力」に関して次のように述べています。

> PISA 調査は、読解の知識や技能を実生活の様々な面で直面する課題においてどの程度活用できるかを評価することを目的としており、これは現行学習指導要領がねらいとしている「生きる力」「確かな学力」と同じ方向性にある。また、学習指導要領国語では、言語の教育としての立場を重視し、特に文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め、自分の考えを持ち論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることが重視されており、これらは PISA 型「読解力」と相通ずるものがある。

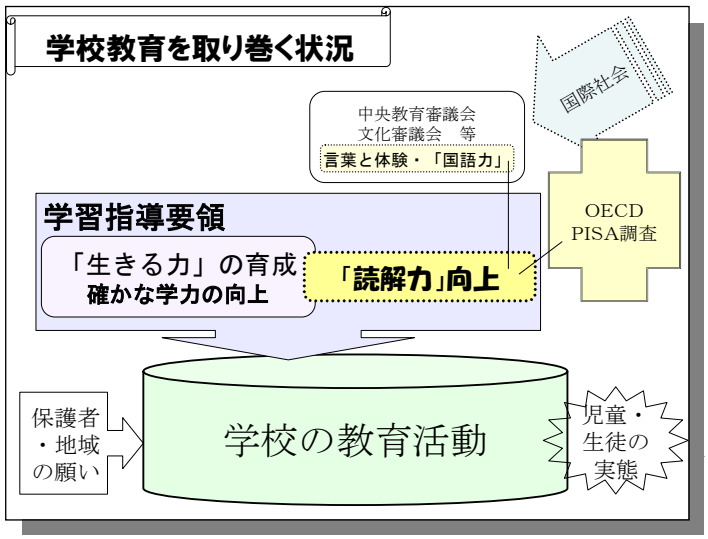
○そして、「読解力向上プログラム」では、「指導の改善の方向」の「基本的な考え方」として次の三つを挙げています。

> ア　PISA 調査のねらいとするところは、現行学習指導要領で子どもに身に付けさせたいと考えている資質・能力と相通じるものであることから、学習指導要領のねらいとするところの徹底が重要である。
>
> イ　PISA 調査の結果から明らかになったことと、教育課程実施状況調査の結果とには共通点があることから、教育課程実施状況調査の結果を受けた改善の提言も併せて指導の改善に生かすことが重要である。
>
> ウ　読解力は、国語だけではなく、各教科、総合的な学習の時間など学校の教育活動全体で身に付けていくべきものであり、教科等の枠を超えた共通理解と取組の推進が重要である。

○また、中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会「審議経過報告」では、「PISA 調査の読解力において低下傾向が見られる」として、「国語力」について「国語科を中核としながら、国語科以外の教科等と連携して、すべての教育活動を通じて、読む力や書く力などを育成していくプロセスを明確にした指導が求められる」としています。

○このように、「読解力」は児童・生徒にとって必要な基本的な能力であり、現行の学習指導要領においても、今後の教育においても「読解力」向上のための取組は必要であるといえます。

○「読解力」として、「テキスト」を理解し、利用し、熟考するといったことは、学習活動だけでなく実生活・実社会において日々行われていることです。そういう点で、「読解力」は正に「生きるために必要な知識や技能」であり、「グローバル化」など、変化の激しい現在の社会において特に求められる能力といえます。



# 参考資料

## 【参考文献】

＊本章を作成する際に引用・参考とした資料として、主なものを載せました。
詳しく知りたいときには、参考にしてください。（ＵＲＬは全て平成19年１月現在）


### ☆PISA調査に関して☆

○文部科学省　「OECD生徒の学習到達度調査（PISA）《2000年調査国際結果の要約》」
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index28.htm

○文部科学省　「OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2003年調査国際結果の要約」
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04120101.htm

○OECD　「PISA　Home Page」　（「OECD版国際報告書（英語）」）
http://www.pisa.oecd.org/pages/0,2966,en_32252351_32235731_1_1_1_1_1,00.html
「Reading Literacy」
http://www.pisa.oecd.org/pages/0,2966,en_32252351_32235979_1_1_1_1_1,00.html

○国立教育政策研究所　平成14年　『生きるための知識と技能 OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2000年調査国際結果報告書』ぎょうせい

○国立教育政策研究所　平成16年　『PISA 2003年調査　評価の枠組み』ぎょうせい

○国立教育政策研究所　平成16年　『生きるための知識と技能２　OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2003年調査国際結果報告書』ぎょうせい

### ☆文部科学省「読解力」向上に関して☆

○文部科学省　平成17年　「読解力向上プログラム」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201/014/005.pdf

○文部科学省　平成17年　「読解力向上プログラム全体像」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201/014/002.pdf

○文部科学省　平成17年　『読解力向上に関する指導資料―PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向―』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201.htm

○文部科学省　平成18年　『読解力向上に関する指導資料 PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向』
東洋館出版社

○文部科学省教育課程課／幼児教育課編集　平成18年　『初等教育資料』５月号・６月号・７月号
東洋館出版社

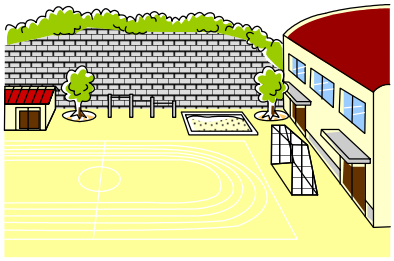
### ☆文部科学省　審議会資料に関して☆

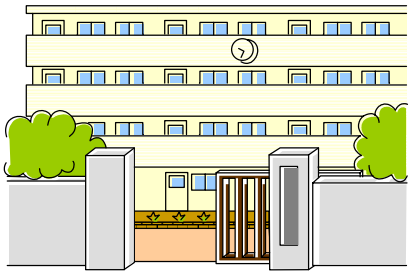
○文部科学省　平成16年　「これからの時代に求められる国語力について」（文化審議会答申）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm

○文部科学省　平成17年　「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05102601.htm

○文部科学省　平成18年　「初等中等教育分科会　教育課程部会　審議経過報告」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06021401.htm

# 第２章
# 「読解力」向上のために





# 第2章－1 「読解力」向上と教科等の学習のために

## 1　スキルの整理とトレーニングの必要性

### (1) スキルの整理の必要性

○「読解力」向上といっても、具体的にどうすればよいのかということが大きな課題となります。

○例えば、「表現する」ということについて、「書く」という行為を取り上げてみます。どうすれば書けるのかが分からずにいる児童・生徒に、「自分の考えを書いてみましょう。」と言ってもなかなか書けないものです。

○書けない理由は児童・生徒によって異なりますが、書くための方法を教えることで書けるようになることがあります。また、児童・生徒が自分の書いたものについて、相手に伝わる文章であるか、目的に合ったものであるかといった点を十分に検討できていない場合もあります。そうした児童・生徒に改めて見直す方法を教えることで文章の校正ができるようになることがあります。

○こうしたことは、「読解力」以外の例を考えてみても分かることです。例えば「スケート」をしたことがない人に「滑ってみてください」と言っても、大抵はすぐには滑れず、繰り返し練習して滑れるようになります。滑るといってもレベルがあり、練習することで上達していきます。どのようにしたらよいかという方法を教えてもらったり、学んだり、自分で考えたりしながらできるようになっていきます。そして、氷の状態に合わせた滑り方もできるようになります。

○「読解力」についても、「読解力」を身に付けたり活用したりするための技能・方法があります。これが“スキル”です。

○“スキル”といっても、様々なとらえ方があります。“Skill”は、「熟練、巧妙さ、技能、わざ、手ぎわ、技術」などと訳されます。一般的に“スキル”は「訓練して身に付けた技能」という意味で、特定の技能や幅広い技能を指して、“コンピュータスキル”“ビジネススキル”“コミュニケーションスキル”“ソーシャルスキル”といった使われ方もしています。また、基礎的な技能を指すこともあります。

○ここでは、第１章で述べた「読解力」のための＜神奈川版＞「四つの力」を身に付けたり、活用したりすることができるための「技能や方法」として“スキル”をとらえていきます。情報を取り出したり、解釈したり、熟考・評価したり、表現したりするための技能・方法として、基本的なスキルを整理し、意図的・計画的に児童・生徒に教え、児童・生徒が活用できるようにすることが「読解力」向上のためには必要となります。

## (2) スキルトレーニングの必要性

○児童・生徒がスキルの内容や使い方を理解したからといって、すぐに「読解力」が向上するというわけではありません。

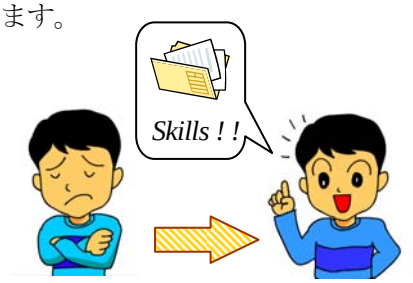
○内容や方法は知っているが使えない、以前は意識してそうしていたのに忘れていた、といったことは多くの人が経験していることです。

○また、「読解力」は「考える」ことを中核としています。「考える」ということは複雑な行為です。「考える」ためには集中力・注意力が必要となり、決して楽しいことばかりではありません。誰でも「考える」ことはしているものの思い込み等の思考の落とし穴や思考の癖と言ったものもあります。

○こうした理由から、スキルについては意図的・計画的にトレーニングすることが必要です。

○実生活・実社会では、多様な「テキスト」について「読解力」が必要となる場面があり、様々な問題に直面します。解決方法を自分で創り出さなければならない場合も多くあります。

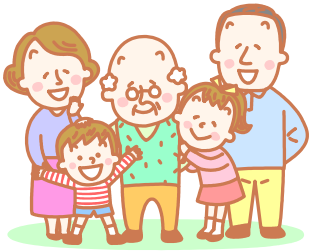
○「読解力」に関するスキルは、そうした際に、「自ら学び自ら考える」ための一つの方法です。「なぜ？」「根拠は？」「他には？」といった自問自答ができるようになったり、客観的に評価できるようになったりするためにも、スキルのトレーニングが必要となります。




○学校の教育活動全体として、スキルの基礎的なトレーニングを行うことや、教科等の学習活動の中でスキルの実践的なトレーニングを行ったり、スキルを活用したりすることは、児童・生徒の確実な「読解力」向上につながります。

○教科等の学習において、「読解力」のための力やトレーニングして身に付けたスキルを活用することは、教科等の目標の達成の一助となります。

○スキルの整理とトレーニングが必要であるといっても、学習活動や実生活で実践的なトレーニングをする中で、児童・生徒が場面に応じたスキルを個々に選択し、組み合わせたり工夫したりして、自分なりのスキルやその活用法を持てるように支援することが重要です。



○PISA 調査は「常に変化する世界にうまく適応するために必要な新たな知識・技能は、生涯にわたって継続的に習得していかなければならない」という考え方に基づいています。そして、「継続的な学習」の基礎となるのが“三つのリテラシー”（読解力・数学的リテラシー・科学的リテラシー）などの知識・技能（knowledge and skills）であるとしています。

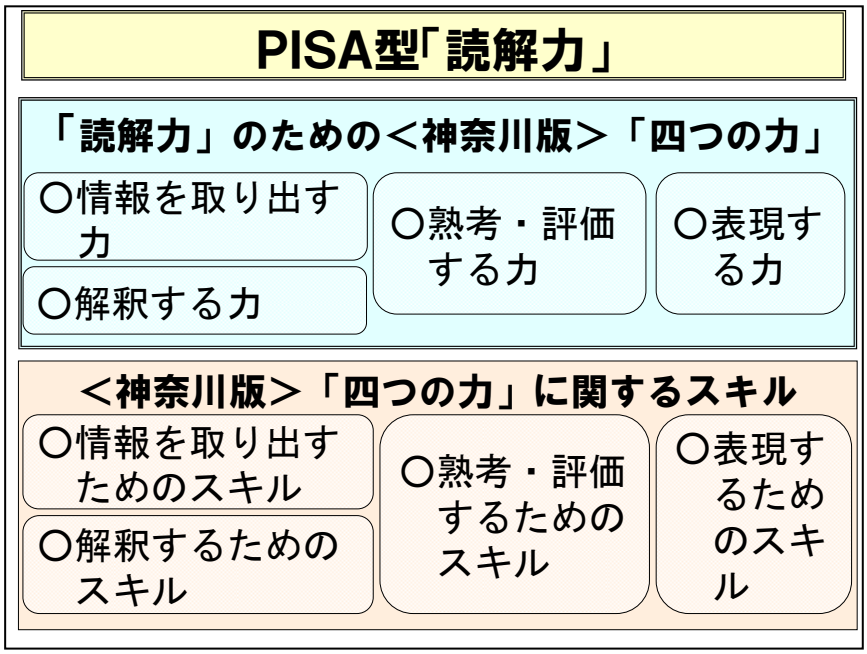
○また、「読解力」を「将来それぞれのコミュニティに積極的に参加することを期待されている生徒たちの手段あるいは道具として捉え」ています。（『生きるための知識と技能２』参照）

○こうしたPISA 調査の考え方にあるように、児童・生徒が「新たな知識・技能」を「生涯にわたって継続的に習得」できるようするためにも、「読解力」に関するスキルについてトレーニングを行うことで、「読解力」向上のための支援をすることが重要です。

## (3) スキル整理の考え方と方法

○「読解力」向上のためにはスキルトレーニングが必要であるといっても、どのようにスキルを整理し、トレーニングすればよいかが次に課題となります。

○ここでは、「読解力」のための＜神奈川版＞「四つの力」に関するスキルについて整理しました。




○「読解力」に関するスキルを整理する上で、PISA 調査における「読解力」の ※「習熟度レベル(「習熟度」)が参考になります。　※*→詳細は第３章参考資料へ*（『PISA 2003 年調査　評価の枠組み』より）

○ここでは、この「習熟度レベル（習熟度）」を基にしながら、次のような考え方で整理を進めました。

**【スキルの整理の基本的な考え方】**

**①基本的なスキル**

児童・生徒の発達段階によって活用するスキルは異なります。また、「書く」行為を取り上げてみても、書くための方法は一通りではなく目的によっても異なり、学問分野に応じたスタイルもあります。このように様々なスキルが挙げられますが、ここでは基本的なスキルとして整理することを目指しました。

**②幅広く活用できるスキル**

「読解力」はすべての教科に必要な基本的な能力の一つであることから、教科等の学習活動や行為に特化したものではなく、幅広く活用できるスキルとして整理することを目指しました。

**③具体的なスキル**

「スキル」といってもとらえ方は様々です。リテラシー（能力）と同じようにとらえられることもあり、「読むこと」「書くこと」といった具体的な行為であったり、「○○を理解すること(ができる)」というように、能力を細分化したようなものであったりします。ここでは、活用しやすいように、具体的なスキルとして整理することを目指しました。

○具体的には、次の三つの方向から資料を収集しました。

**【資料の収集】**

**【文献…「読解力」に関連する文献調査】**

○基礎的な調査として、また実践を支えるためにも必要な理論に関する調査として、スキルに関連すると考えられるものを次の観点から収集。

①考える力（「読解力」の中核にある「考える」ことに関すること。クリティカル・シンキングに関すること。）

②課題解決力（「生きる力」やPISA調査の考え方「社会で直面する様々な状況や課題に適応できるようなもの」を踏まえ、実生活・実社会で必要となる「問題解決力」に関すること。）

③コミュニケーション力（「読解力」のうち特に「熟考・評価」や「表現」にかかわるものであり、またPISA型「読解力」が効果的に「社会に参加する」ためのものでもあることを踏まえ、コミュニケーション力、話し合いや質問の仕方等に関すること。）

④スキル（教科等の学習に必要な能力であることから、“学習スキル”に関することなど。）

⑤具体的な行為（「読む」「書く」「聞く」「話す」等の具体的な行為に関すること。）

**【事例…事例による調査】**

○学校で実際に活用できるスキルを整理するために必要な調査として、「読解力」に関する実践事例（学習指導案）から、スキルに該当すると考えられるものを収集。

**【研究開発…「読解力向上」に関する本研究過程におけるスキルの具体例作成】**

○これまでの学習を「読解力」の視点で見直し、カリキュラム・マネジメントの考え方を踏まえ、実際に学校で活用できるスキルを整理するために、教科等の学習指導案作成時に、次の点に留意して作成したスキルを収集。

①「スキル」は、＜神奈川版＞の「四つの力」のいずれかができるようになるための技能や方法として、これまでの知識や経験から具体的に考える。

例）・「○○（「四つの力」のいずれか）」ができるようになるためには、どのようなこと（方法や技能）が必要か？

・どのようにすれば、「○○（「四つの力」のいずれか）」ができるようになるか？

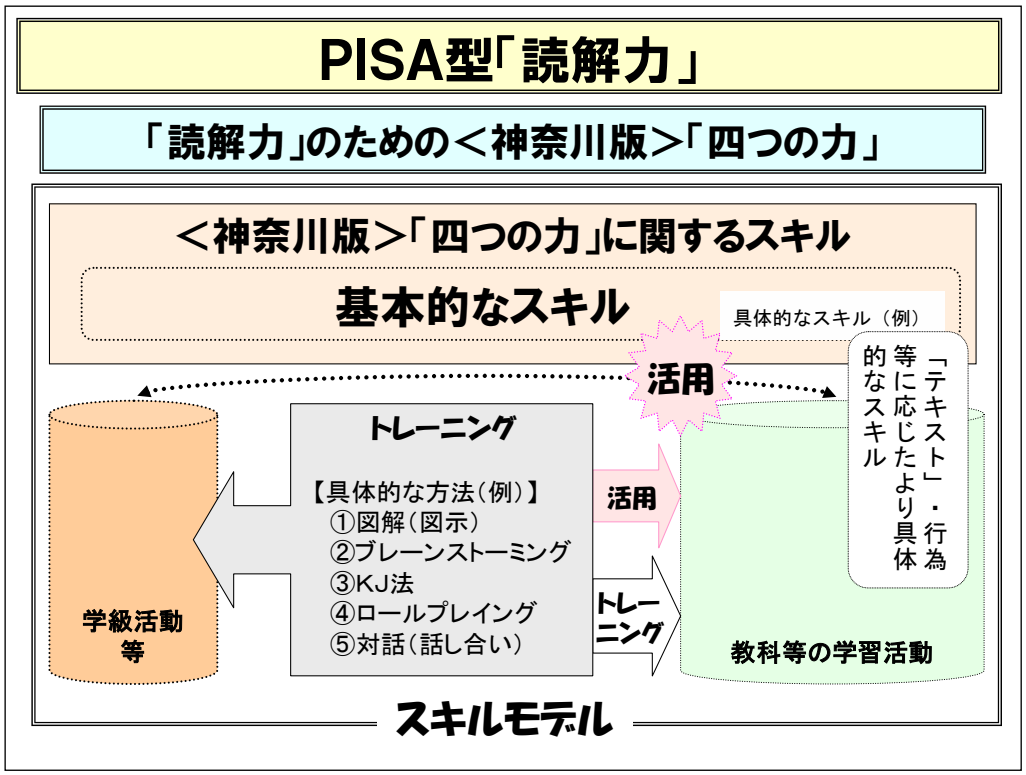
②教科等において共通に取り組めることとして考える。

○このようにして収集したものについて、次の二点から分析し、整理しました。

①どの教科でも活用できるものであること。　②発達段階にも対応できるものであること。

# ２　スキルモデル

○「読解力」のための＜神奈川版＞「四つの力」に対応した「四つのスキル」に関して、基本的なスキル及びより具体的なスキル、更にはスキルトレーニングの方法をまとめて、“スキルモデル”を作成しました。




○PISA 調査の「読解力」に関する「習熟度レベル（習熟度）」を基本としながら、「読解力」のための＜神奈川版＞「四つの力」に関するスキル等について整理し、モデルを作成しました。

○その過程で、「読解力」は実生活・実社会において日々求められる能力であり、トレーニングが必要なことであることから、数多くの文献から共通するものを取り上げました。
○一方で、「読解力」はすべての教科に必要な基本的な能力であることから、これまでの授業等で行われていたことを振り返ると共に、今回新たに学習指導案を作成する過程で実際に必要なものとして考えたことからも共通するものを取り上げました。
○結果として、両者には共通点がありました。

○これまでの授業等の中で行われたことについて、意図的・計画的に行い、その取組を評価することが重要です。また、スキルを整理して、繰り返しトレーニングし、実践を重ね、その取組を評価することも重要です。こうした取組が「読解力」向上につながります。

○スキルについては、基本的なスキルを基に、実践の中で「テキスト」や「行為」に応じたより具体的なスキルを考えることが重要です。

## (1) 四つの基本的なスキルモデル

○「四つの力」に関する基本的なスキルとして、次のような例が挙げられます。

1 **情報の取り出しのためのスキル**（例）

① テキストにある明示的な情報を見付け出すことができる。
② テキストにある対立する情報を見付け出して処理することができる。
③ テキストにある複数の関係する情報を見付け出すことができる。
④ テキストにある複数の情報を順序付けることができる。
⑤ テキストにある複数の情報を結び付けることができる。
⑥ テキストにある複数の情報の関連を推論することができる。

2 **解釈のためのスキル**（例）

① テキストの主要な点（意図、ねらい、主題、キーワード等）を認識することができる。
② テキストにある複数の情報の関連性を理解することができる。
③ テキストにある複数の情報を分類することができる。
④ テキストにある複数の情報を統合することができる。
⑤ テキストにある複数の情報を比較したり、対照したりすることができる。
⑥ テキストにある曖昧（あいまい）なもの、予想に反するものを処理することができる。
⑦ テキストの内容について予想したり推論したりして、理解することができる。

3 **熟考・評価のためのスキル**（例）

① テキストにある情報をテキスト以外の情報と結び付けることができる。
（一般的で日常的な知識／個人の経験や意見／身近な知識／公的な知識）
② テキストにある情報をテキスト以外の情報と比較することができる。
③ テキストにある情報をテキスト以外の情報と関連付けて、内容を理解することができる。
④ テキストの内容について予想したり、仮説を立てたりすることができる。
⑤ テキストの内容について予想に反した概念を処理することができる。
⑥ テキストの内容や形式について批判的に評価することができる。
⑦ テキストの内容について正確に理解したり、深く理解したりすることができる。

4 **表現のためのスキル**（例）

① テキストの主要な点について印象を表すことができる。
② テキストにある言葉を用いてテキストの内容を表すことができる。
③ テキストの主要な点から見出しを付けることができる。
④ テキストの構造や特徴を表すことができる。
⑤ テキストについて考えたことを体験と結び付けて表すことができる。
⑥ テキストについて考えたことを根拠を明らかにして表すことができる。
⑦ テキストについて考えたことを適当な表現方法で表すことができる。

○先の「基本的なスキル（例）」に関する具体的なスキルとしては、次のようなものが挙げられます。

## １　情報の取り出しのためのスキルに関する具体的なスキル（例）

○「明示的な情報を見つけ出す」「複数の情報を順序付ける」「複数の情報を結び付ける」際に、**「５Ｗ１Ｈ」**を意識して行う方法が挙げられます。

○発達段階や内容に応じて、確認する事柄を増減する（**４Ｗ１Ｈ、７Ｗ１Ｈ１Ｄ**）方法もあります。

**「７Ｗ１Ｈ１Ｄ」**とは次のとおりです。（『すぐに使える問題解決法入門』より作成）

| | | |
|---|---|---|
| When | 時刻や時間 | いつ |
| Where | 場所 | どこで |
| Who | 主体（主人公） | だれが／だれは |
| Whom | 客体（相手） | だれに／だれを／だれと |
| What for | 目的 | 何のために |
| What | 中身や内容 | 何を |
| in What | 手はず | どんな手順で |
| How | 方法 | どのように／どんな方法で |
| Do | 行動 | どうする |

※こうした方法は、テキストを解釈する上で、テキストに書かれていることや全体像を確認する際にも活用できます。熟考・評価、表現に際しても、「５Ｗ１Ｈ」を意識して行うことで、自分の考えを明確にしたり、相手に分かりやすく伝えたりすることにも役立ちます。

## ２　解釈のためのスキルに関する具体的なスキル（例）

○「関連性を理解する」「比較したり、対照したりする」際には、次のような表現を用いる方法が挙げられます。

「◇◇と□□とを比べると、○○ということが分かる。」

「◇◇と□□は同じことと言えるだろうか。別だと言えるだろうか。」

「◇◇から見れば～～だけれど、□□から見れば……だ。」（『学習スキルで授業を変える』参照）

○「分類する」「統合する」の際には、**「事実と意見」**とを区別するようにします。他にも、「事実（意味と解釈）」「推論」「伝聞」「経験」等について、それぞれ区別するようにします。

○次のような接続関係について、代表的な言葉とその使い方を確認するようにします。

**「付加」「理由」「例示」「転換」「解説」「帰結」「補足」**

## ３　熟考・評価のためのスキルに関する具体的なスキル（例）

○「批判的に評価する」「正確に理解したり、深く理解したりする」際には、正しいかどうかを確認したり、考えたりするために、**「なぜ？（なぜ～は～だと言えるのですか？）」「それから？」**と問いかける方法が挙げられます。理由は一つだけでなく、複数挙げ、掘り下げていきます。他者への問いかけや他者からの問いかけだけでなく、自分自身に問いかける（自問できる）ようにすることが重要です。

○「比較する」「関連付ける」際には、次のような表現を用いて、「書き換える」「言い換える」方法が挙げられます。その際には、一つではなく複数を挙げるようにします。

**「具体的には？」「他には？（もう少し）」**

他にも、「要約」する方法も挙げられます。その際には、「帰納法」や「演繹法」を活用することができますが、導き出した結論について妥当であるかのチェックが必要です。

4　**表現のためのスキルに関する具体的なスキル**（例）

○「体験と結び付けて表す」「根拠を明らかにして表す」際には、**「意見―根拠」**を明確にして表現する必要があります。そこで、例えば、**「私は～と思います。その理由は～です。」**というような言い方を意識して使うようにします。根拠が曖昧な場合には、「考え中である」等の表現としてその旨を伝え、根拠を明確にしていくために考えたり調べたりするようにします。

○特に、「書く」「話す」際には、日本語の特性として主語と述語が離れている、主語を省略するといった傾向があることから、**「主語―述語」**を明確にするようにします。なお、根拠、矛盾点等を明確にする際に、チェックリスト法を使うこともできます。チェックリストとは、確認もれやミスがないかを確かめるためのもので、確認事項をリスト化して、チェックしていく方法です。ブレーンストーミングの考案者が考えた９チェックリスト法を応用するといった方法も挙げられます。（項目：転用、応用、変更、拡大、縮小、代用、再配列、逆転、結合）

○「適当な表現方法で表す」際には、次のような様々な種類で表現を変えていく例が挙げられます。

言葉／言葉、絵／絵、絵／文、文／表やグラフ、長文／短文
文字言語／文字言語、文字言語／音声言語、音声言語／音声言語
抽象／具体、客観的／主観的　テーマ／キーワード／見出し／シンボル　等

## (2) スキルのトレーニング方法のモデル

○先の「四つのスキル」を身に付けたり、活用したりするための具体的なトレーニング方法として、次のような例が挙げられます。

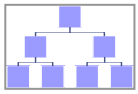
| スキル / ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ方法（例） | 情報の取り出しのためのスキル | 解釈のためのスキル | 熟考・評価のためのスキル | 表現のためのスキル |
|---|---|---|---|---|
| 図解（図示） | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ブレーンストーミング（ＢＳ法） | | | ○ | ○ |
| ＫＪ法 | | ○ | ○ | ○ |
| ロールプレイング（役割演技法） | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 対話（話し合いの方法） | ○ | ○ | ○ | ○ |

1　**図解（図示）**（概念図、マトリックス、グラフ　等）

○情報を理解したり、考えたりするためには、図を理解したり、図解（図示）したりすることが重要です。

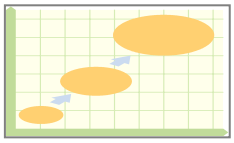
○図解（図示）の方法としては、次のようなものが挙げられます。

a　アイデアを出したり発想を広げたりするためにマインドマップやウェッビング、概念を階層化するためにコンセプトマップやウェッビング、論理的に考えるために三角ロジック、構成要素を分解するためにロジックツリー、主張と根拠、問題点と詳細を明確にするためにピラミッドストラクチャーといった技法を使う例が挙げられます。



b　何かの手順（流れ）を明確にするためのフローチャートとしては、原因や問題点を整理するためのフィッシュボーンがありますが、カードを使って示すこともできます。

c　マトリックスを利用した方法としては、発想するためのマトリックス法や、分析するためのSWOT分析などがあります。SWOT分析は、強み(Strength)・弱み(Weakness)といった内部要因と、機会(Opportunity)・脅威(Threat)といった外部要因の四つの変数を表にしたものです。このほかにも、座標軸を作る方法が挙げられます。



［トレーニングの方法や支援の方法（例）］

・円や四角などで囲むこと、複数の形の矢印などで結ぶことが基本的な図解です。形・大きさ・色などによって意味や役割が異なることを理解させ、約束事を決めることが重要です。

・変数の種類を増やしたり、変数を決めるところから始めたりします。

・最初のうちは少ない変数で基本的な枠組みを用意して、必要な時にすぐに使えるようにしておく方法もあります。（例えば、「肯定／否定」「同じ／違う」「前／後」「不可欠／望ましい（→「必要条件／十分条件」）」などです。

・変数を決める際にも、一人で考えたり、グループでブレーンストーミングをしたりします。

○図解については、合意形成やプレゼンテーションにも使われます。

## 2　ブレーンストーミング　（ＢＳ法）

○創造性開発の技法の中でも基本的で、よく使われる技法です。グループでアイデアを出し合うやり方で、自由に発想を広げていきます。

・６～７名のグループで、テーマを設定し、リーダー・記録係を決めて、四つのルールに従い、アイデア・意見を出していきます。記録係は、ホワイトボード・模造紙等に書いていきます。

・ただ一つの解答や結論を求めるテーマはあまり向いていません。

・四つのルール：自由奔放、批判厳禁（判断延期）、大量発想、結合改善（便乗発展）

○アイデア・意見を整理したり図解したりする技法としては、ＫＪ法、クロス法などがあります。

○ＢＳ法以外には、次のような方法があります。

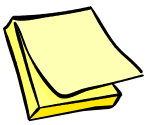
・連想ゲーム、マインド・マップ、カードＢＳ法などが挙げられます。

・自由に発想することが難しい場合には、発想のヒントを提示して関連付けて考える方法としてチェックリスト法、マトリックス法、Ｎ２法といった発想法が挙げられます。

・テーマと本質的に類似しているものを発想していく方法として、NM法があります。

「カードＢＳ法」

・ブレーンストーミングの際に、アイデア・意見を一つ一つ小さなカードや付箋に書いていく方法です。発言に慣れていないメンバーがいたり、考える時間が必要だったり、メンバーが集まりにくかったりする場合などに便利な技法です。



・また、グループではなく、一人で行うこともできます。

## 3　ＫＪ法　［考案者である川喜田二郎氏の頭文字を取って名付けられた技法］

○創造性開発または創造的問題解決の技法で、様々な発展型が生み出されました。一般的には次のような手順で行います。

①ＢＳ法などで、アイデア・意見、情報・データ等を一つずつ小さなカードに書き込む。

②カードの中から同じようなもの（内容・本質・考え方が同じようなもの）を数枚ずつ集めて

束（小グループ）にする。
③グループにタイトルを付ける。
④小グループから中グループ、大グループへとまとめていく。
⑤大きなグループから順に模造紙などに展開し、線で囲んだり結んだりして、グループ同士の関係を図解していく。

［トレーニングの方法や支援の方法（例）］
・カードを眺めてグループ化することから始め、段階を踏んでいく方法が挙げられます。
・タイトルが重要なので、内容のポイントを押さえた簡潔な表現になるように、最初のうちは必要に応じて教員が支援します。図解についても必要に応じて教員が支援します。
・アイデアを短時間にまとめる技法としては、事前にカードを均等にメンバーに配分し、各自でグループ化し、それを持ち寄ってグループ化していくという、ブロック法があります。
・重要度を評価し、順位付けをして一覧表にするクロス法があります。この技法を使うと出てきた意見の全体像が一目で把握でき、重要な項目が読み取りやすくなります。

## 4　ロールプレイング（役割演技法）

○現実に近い場面を設定し、参加者に特定の役割を演技（ロールプレイ）させることによって、相手の気持ちを理解させたり、基本動作などを体験的に習得させたりする技法です。
①４～６名のグループで、ある場面を設定して、役割を決定し、演技の準備をする。
②２人１組で役割の演技をする。残りは観察者となる。
③演技後に、フィードバックとして、主役が自己の言動を振り返ってのコメントを述べ、次に相手役が演技の中で感じた気持ちを述べ、最後に観察者が一人ずつ順番にコメントを述べる。

［トレーニングの方法や支援の方法（例）］
・観察者用のシートを作成したり、想定問答の形式で記入するワークシートを用意したりします。
・それぞれの立場からのコメントが重要なので、「改善点」だけではなく「良かった点」に気付かせるようにします。

## 5　対話（話し合いの方法）

○対話をする人数・目的によって方法は異なります。教科国語で学習する内容も含みますが、実践的にトレーニングすることが重要です。
○具体的な方法としては、次のようなものが挙げられます。
スピーチ、フリートーキング、バズセッション、ポスターセッション、ディベート、パネルディスカッション、シンポジウム

［トレーニングの方法や支援の方法（例）］
・最初のうちは、自分の意見をまとめてから話すようにさせます。プレゼンテーションも練習するようにします。
・質問の仕方やコメントの仕方（評価方法）なども練習するようにします。最初のうちは、典型的な表現を提示したり、チェックシートを用意したりします。
・交渉する（ﾈｺﾞｼｴｰｼｮﾝ）、円滑に進める（ﾌｧｼﾘﾃｰｼｮﾝ）、 合意形成を図るといった方法も練習するようにします。話し合うきっかけを作る方法としては、アイスブレークが挙げられます。

# 参考資料

## 【参考文献】

＊スキルを整理する際に参考にした資料の一部を紹介します。（ＵＲＬは全て平成 19 年１月現在）

### ☆PISA 調査に関して☆

**【リテラシーとスキルについて】**

◆ドミニク・Ｓ・ライチェン、ローラ・Ｈ・サルガニク編著（立田慶裕監訳）2006 『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして 』明石書店

○PISA 調査にも関連して、「学習への意欲や関心から行動や行為に至るまでの広く深い能力観、コンピテンシー（人の根源的な特性）に基礎づけられた学習観への大きな視点が必要となってきている」ことから、コンピテンシーの国際的な標準化を目指す“DeSeCo”プロジェクトの成果をまとめたもの。（“DeSeCo”（通称“デセコ”）プロジェクトとは、「コンピテンシーの定義と選択：その理論的・概念的基礎」プロジェクトのこと。）

**【フィンランドの取組について】**

◆メルヴィ・バレ、マルック・トッリネン、リトバ・コスキパー（北川達夫＆フィンランド・メソッド普及会訳）2006 『フィンランド国語教科書　小学校３年生』経済界

◆メルヴィ・バレ、マルック・トッリネン、リトバ・コスキパー（北川達夫＆フィンランド・メソッド普及会訳）2005 『フィンランド国語教科書　小学校４年生』経済界

○PISA 調査「読解力」で連続１位となった国の教科書の邦訳。

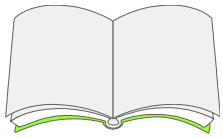
◆北川達夫、フィンランド・メソッド普及会訳　2005 『図解 フィンランド・メソッド入門』経済界

○フィンランド国語教育について五つのメソッドで解説。

◆ジェニ・ウィルソン、レスリー・ウイング・ジャン（吉田新一郎訳） 2004 『「考える力」はこうしてつける』新評論

○第２章「自立した学習者を育てる」では、「ポジティブな学習環境」づくりについて解説。

○交渉、質問、学習日誌、概念図、自己評価についても解説。



### ☆考える力☆

**【クリティカル・シンキングについて】**

◆Ｅ．Ｂ．ゼックミスク、Ｊ．Ｅ．ジョンソン（宮元博章、道田泰司、谷口高士、菊地聡訳）1996 『クリティカル　シンキング《入門編》』北大路書房

◆Ｅ．Ｂ．ゼックミスク、Ｊ．Ｅ．ジョンソン（宮元博章、道田泰司、谷口高士、菊地聡訳）1997 『クリティカル　シンキング《実践編》』北大路書房

○「クリティカルな思考」とは「適切な規準や根拠に基づく、論理的で偏りのない思考」であるとし、そこには三つの要素が含まれていて、最も重要なのは「問題に対して注意深く観察し、じっくり考えようとする態度である」としている。クリティカル・シンキングのための原則を解説。

◆リチャード・ポール、リンダ・エルダー（村田美子、巽由佳子訳）2003 『クリティカル・シンキング 「思考」と「行動」を高める基礎講座 』東洋経済新報社

○大学生のテキストとして書かれた原著から日本の読者にすぐに役立つ章を選び翻訳されたもの。

**【思考・発想・図解について】**

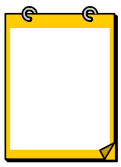
◆市川伸一 1997 『考えることの科学 推論の認知心理学への招待 』中公新書

○日常生活での思考で繰り返される“推論”について、論理的な推論・確率的な世界の推論・推論を方向づけるもの（知識、感情、他者）の三つの構成で解説。

◆マリリン・バーンズ（左京久代訳）1985 『子どものためのライフ・スタイル 考える練習をしよう』晶文社
○「子どもたちにとって、ほんとうに必要な『生きるための知識』とは何だろう。」と言う問いから発して作られたシリーズの一つ。10 歳以上を対象に、問題にぶつかった時に「頭をどう使えばいいか？」ということ、つまり考える方法について例題を示しながら解説。
◆西村克己 2006 『論理的な考え方が身につく本 問題解決力がアップする 35 の思考スキル 』PHP 研究所
○「論理思考の基本」の後に、「図解する思考法」など六つの思考法について解説。
◆野矢茂樹 2001 『論理トレーニング 101 題』産業図書
○論理力を鍛えるための練習問題と解説。
◆高橋誠 2005 『アイデアが面白いほど出てくる本』中経出版
○ＢＳ法、ＫＪ法、NM法、マインド・マップ、チェックリスト法、マトリックス法、クロス法、フィッシュボーン法などの「これだけは身につけたい 16 の手法」について解説。
◆船川淳志 2004 『［図解］ビジネスの現場で活きる 思考力と対人力』日本経済新聞社
○ビジネススキルについて、35 項目の要点・図解・クイズにより解説。
◆バーバラ・ミント（株式会社グロービス監修、山崎康司訳）1995 『考える技術・書く技術 ―説得力を高めるピラミッド原則― 』ダイヤモンド社
○ピラミッド構造やその作り方を解説。演繹（えきえき）法と帰納法についても解説。
◆久恒啓一 2004 『頭のいい子は図で育つ』全日出版
○子どもが「図解発想・図解思考」を身に付けることを目的に書かれたもの。「矢印の基本」についても解説。
◆堀公俊、加藤彰 2006 『ファシリテーション・グラフィック 議論を「見える化」する技法 』日本経済新聞社
○ファシリテーション・グラフィック上達のための六つのポイントについて解説。

## ☆問題解決力☆

◆B.ミラー、J.ヴィハー、R.ファイアスティン（弓野憲一監訳）2006 『創造的問題解決 なぜ問題が解決できないのか？ 』北大路書房
○「創造的問題解決（CPS）」とそれに関係する発散ツール、収束ツールとして種々の方法を解説。
◆西村克己 2004 『問題解決のツールブック』日本実業出版社
○問題解決の手順と手法について解説。
◆石桁正士、渡邉寛二監修、教育理学研究会編著 2005 『すぐに使える問題解決法入門』日刊工業新聞社
○「理論編」と「実践編」に分け、「実践編」では具体的な方法について解説。



## ☆コミュニケーション力☆

**【コミュニケーションについて】**

◆有元秀文 2006 『「国際的な読解力」を育てるための「相互交流のコミュニケーション」の授業改革 ―どうしたら PISA に対応できるか― 』渓水社
○PISA 調査で要求される読解力や論理的な表現力が発揮されるために必要なものとして、「相互交流コミュニケーション」について解説。
◆藤原慎也 2003 『クリティカル・コミュニケーション』同友館
○日常のコミュニケーションとクリティカル・コミュニケーションとを区別し、「わかりやすく正確にまとめる」「わかりやすく正確に伝える」ための方法について解説。
◆多田孝志 2006 『対話力を育てる ―「共創型対話」が拓く地球時代のコミュニケーション― 』教育出版
○６章は「対話力スキルアップ」として、具体的なスキルについて解説。

**【質問力について】**

◆M・ニール・ブラウン、スチュアート・キーリー（森平慶司訳） 2004 『質問力を鍛える クリティカル・シンキング練習帳 』PHP 研究所

○クリティカル・シンキングのための「クリティカル・クエスチョン」として、基本となる 11 の質問について解説。

◆齋藤孝 2006『質問力 話し上手はここがちがう 』ちくま文庫

○質問のための座標軸思考法や練習方法等について解説。

◆飯久保廣嗣 2006 『質問力 論理的に「考える」ためのトレーニング 』日経ビジネス人文庫

○「学ぶ質問」「考える質問」、質問のルール等について解説。「質問力の自己診断」として質問力テストについても掲載。

**【話し方や会議の仕方について】**

◆西村克己 2006 『論理的な話し方が身につく本 ストーリーの組み立てから説得テクニックまで 』PHP 研究所

○「論理的に話す基本技術」を始めとして、「論理的に話すための『聞く』技術」「プレゼンで説得する技術」を含めた話し方の技術について解説。基本技術では「三角ロジック」についても解説。

◆鶴野充茂 2006 『あたりまえだけどなかなかできない説明のルール』明日香出版社

○「伝える力＝説明力」として、説明の 101 のルールについて解説。

◆北川達夫 2004 『［欧米式］作文メソッドでＯＫ！ 「論理力」がカンタンに身につく本 説得・交渉・コミュニケーションの達人になる３ステップ 』大和出版

○基礎編（「論理力」を磨くための五つのルール等）、実践編（書くための七つの型等）に分けて解説。

◆八代京子監修、鈴木有香著 2004 『交渉とミディエーション 協調的問題解決のためのコミュニケーション 』三修社

○非言語コミュニケーション、言語コミュニケーション、ミディエーションのトレーニング方法について解説。

◆堀公俊 2006 『今すぐできる！ファシリテーション 効果的なミーティングとプロジェクトを目指して 』PHP ビジネス新書

○「35 の実践フレーズ」として、具体的な表現を紹介。

◆日本ファシリテーション協会（特定非営利活動法人） 「ファシリテーションのツール」

http://www.faj.or.jp/modules/tinyd2/index.php?id=4

○「アイスブレーク」について解説。

## ☆スキル☆

◆御立尚資 2006 『知識とスキルを結果につなげる 使う力』PHP ビジネス新書

○「使う力」を定義するための三つの必要条件を提示し、「条件その２」としてスキルについて解説。

◆上條晴夫、進藤聡彦編著 2005

『ゲームで身につく学習スキル【小学校】 問題解決力を育てる授業プラン 26 』図書文化社

『ゲームで身につく学習スキル【中学校】 問題解決力を育てる授業プラン 27 』図書文化社

○「学習スキル」を「一定の範囲の学習活動に役立つ内的、外的な技能」として、学習スキルを学ぶための学習ゲームを紹介。

◆多田孝志、田川寿一編集代表、学習スキル研究会編 2002『学習スキルの考え方と授業づくり ―地球時代のコミュニケーション・情報活用・自己啓発力を高める― 』教育出版

○「学びの基本的な技能」を学習スキルと名付け、学び方を取得し、生きる力を高めていくために不可欠な実践的な技能であるとしている。そして、３種類の学習スキル及びこれらをサポートする教師スキルについて解説。

◆新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校 2002 『学習スキルで授業を変える』明治図書出版
○「学習スキル」は二つの「方法・技法」であるとして、学校としての実践について紹介。
◆市川伸一監修、横浜市立本町小学校著 2006 『自ら学びを高める子を育てる 教えて考えさせる授業 ―横浜本町小の挑戦― 』明治図書出版
○「学習スキルを高める指導 ～「コミュニケーション力」を育てる～」として三つのスキルを紹介。
◆東京都江東区立第四大島小学校（赤石保校長） 平成 17 年 「人とものとのかかわりを生かし、自ら進んで学ぶ子の育成 ―コミュニケーション能力の育成をめざして― 」（平成 15・16 年度江東区教育委員会研究協力校）
○コミュニケーション能力の育成を目指した「Stage」「Skill」等の学校としての実践について紹介。
◆熊本県立鹿本高等学校 平成 14 年 『高等学校の生徒の能力、適性、進路等に弾力的に対応する教育課程の研究開発 「総合的な学習の時間」に係る研究開発』文部科学省研究開発学校：平成 13 年度（最終年度）研究開発実施報告書
○ＢＳ法、ＫＪ法等を活用した取組を紹介。
◆生涯職業能力開発促進センター（独立行政法人雇用・能力開発機構） 「能力開発技法一覧」
http://nokai.ab-garden.ehdo.go.jp/giho/main.shtml
○「能力開発技法」として種々の技法及び「教育ゲーム」について解説。
◆開発教育協会（特定非営利活動法人） 「やってみよう！参加型学習」
http://www.dear.or.jp/activity/index.html
○「実践編」として、ブレーンストーミング、ランキング、イメージマップ等について解説

## ☆具体的な行為（読む、書く、聞く、話す等）他☆

◆入部明子 2003 『パワー・ライティング』全日出版
◆照屋華子 2006 『ロジカル・ライティング』東洋経済新報社
◆山本博樹、海保博之 2001 『人を動かす文章づくり ―心理学からのアプローチ 』福村出版
◆古郡廷治 1999 『文章添削トレーニング ―八つの原則 』ちくま新書
◆樺島忠夫、佐竹秀雄 1978 『新文章工学』三省堂
◆藤沢晃治 1999 『「分かりやすい表現」の技術 意図を正しく伝えるための 16 のルール 』講談社
◆藤沢晃治 2002 『「分かりやすい説明」の技術 最強のプレゼンテーション 15 のルール 』講談社
◆髙木展郎 2003 『ことばの学びと評価 ―国語科授業への視角 』三省堂
◆府川源一郎、高木まさき、長編の会編著 2004
『認識力を育てる「書き換え」学習 ―小学校編― 』東洋館出版社
『認識力を育てる「書き換え」学習 ―中学校・高校編― 』東洋館出版社
◆森本信也 2002 『論理を構築する子どもと理科授業 ―学ぶ力と心を育てる授業の発信― 』東洋館出版社
◆森本信也編著 2007 『考え・表現する子どもを育む理科授業』東洋館出版社
◆橋本吉彦、坪田耕三、池田敏和 2003 『Lesson Study／今、なぜ授業研究か ―算数授業の再構築― 』東洋館出版社
◆横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校ＦＹプロジェクト（髙木展郎校長） 2006 『「読解力」とは何か ―PISA 調査における「読解力」を核としたカリキュラムマネジメント― 』三省堂
◆横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編（髙木展郎校長） 2007 『「読解力」とは何か PartⅡ ―カリキュラム・マネジメントで年間指導計画・学習プロセス重視の指導案― 』三省堂
◆学力向上拠点形成事業・文部科学省委託委嘱「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」研究会（国語）読解力向上プログラムに係る「読解力向上のための指導事例集」作成委員会 平成 18 年 『読解力向上のための指導事例集』（学力向上拠点形成事業「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」）

# 第2章－2　学校の教育活動全体で取り組むために

## 1　学校の教育活動の構造化

### (1) 学校の教育活動と「読解力」向上

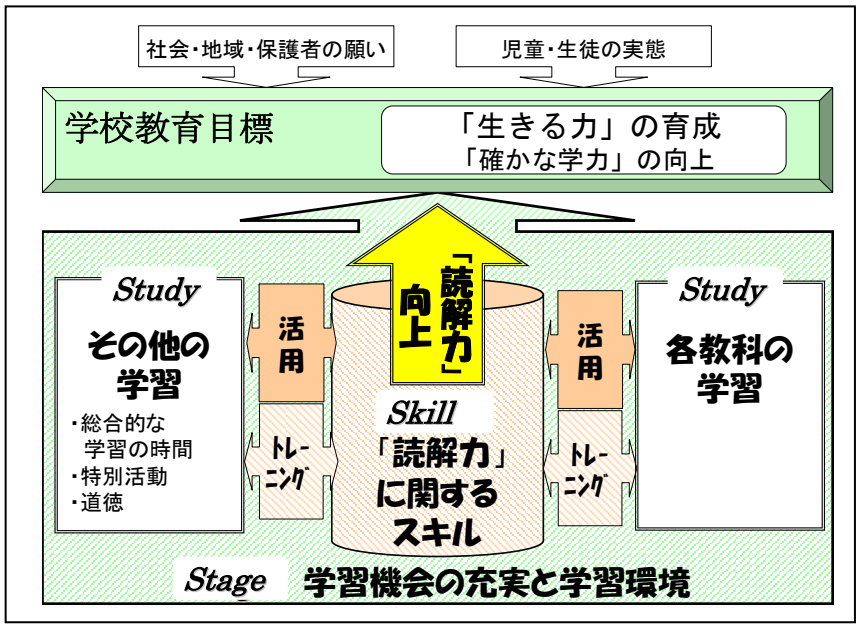
○児童・生徒に身に付けさせる必要があるものの一つとして「確かな学力」があります。学力は様々な力に細分化されますが、すべての教科に必要な基本的な能力の一つとして「読解力」が挙げられます。児童・生徒の「読解力」向上のための取組は、教科等で個別に行うのではなく、学校の教育活動全体でとらえる必要があります。

○また、「読解力」向上のためには、スキルトレーニングをする必要があります。 *(→第2章－1)*

○学校の教育活動全体で取り組むには、これまでの学校における教育活動を“カリキュラム・マネジメント”により見直すことから始め、「読解力」に対する共通理解のもと、教科や学年で共通に取り組む事柄について協議し、意図的・計画的に学習機会を設定することが重要となります。

○そこで、学校全体で取り組むための方法として、学校全体でコミュニケーション能力の育成に取り組んでいる学校の例を参考に、教育活動全体を＜三つのＳ＞として構造化し直し、「読解力」向上のためのコンセプトモデルを作成しました。

※カリキュラム・マネジメントとは「学校または教師が学校教育目標に基づき、児童・生徒や地域等の実態を踏まえて開発したカリキュラムを、編成＝計画(Plan)し、実施＝展開(Do)して点検＝評価(Check)、改善(Action)を図るという一連のサイクル(PDCA)を計画的・組織的に推進していくための条件づくり・整備を行い、経営的な活動を展開していくこと」です。




＊髙木展郎氏は「カリキュラムマネジメントによって、学校での教育の総体を対象化することにより、これまで個別に切り離されて行われてきた様々な教育活動が、トータルなものとしてとらえることのできる視点を獲得することができる。このことは、各教科ごとにとらえてきた学校教育の内容をも再構築する視角をもつことにもなる。」と述べています。（横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校ＦＹプロジェクト 2006 『「読解力」とは何か』三省堂 p. 33）

＊参考にした学校：東京都江東区立第四大島小学校 （平成 17 年「人とものとのかかわりを生かし、自ら進んで学ぶ子の育成」）

## (2)「読解力」向上と＜三つのＳ＞

○＜三つのＳ＞とは、Stage「学習機会の充実と学習環境」、Skill「読解力」に関する「スキル」、Study「教科等の学習」という三つのことで、これらの相互補完・相乗効果により、「読解力」向上を目指すものです。

→ ＜Stage＞の詳細は第２章－２の３へ

### 【Stage … 学習機会の充実と学習環境】

■「読解力」が日常生活に不可欠な能力であることから、学校生活において「読解力」に関する学習機会の充実を図り、学校全体での日ごろからの「読解力」向上を目指します。

○教室の掲示板等を利用するなどして学習環境の充実を図り、日々の学校生活の中で、児童・生徒の読む等の機会が自然と増えるようにします。

○様々な機会を活用して、意図的・計画的に読む等の活動を増やすことで、学習機会の充実を図ります。

→ ＜Skill＞の詳細は第２章－１へ

### 【Skill …「読解力」に関するスキル】

■「読解力」がすべての教科に必要な基本的な能力であることから、「読解力」に関するスキルトレーニングを行います。そして、児童・生徒がスキルを身に付け、活用できるようになることを目指します。

☆学校の教育活動全体として、計画的・意図的にスキルの基礎的なトレーニングを行います。

☆また、教科等の学習活動の中で実践的なトレーニングを行ったり、スキルを活用したりします。

→ ＜Study＞の詳細は第２章－２の２へ

### 【Study … 教科等の学習】

■教科等の学習活動を考えてみると、その中には「読解力」が必要な場面があります。そこで、教科等の目標を達成するためにも、教科等の学習活動における「読解力」向上を目指します。

☆教科等の学習活動において「読解力」が必要となる場面を取り上げ、トレーニングした「読解力」に関するスキルを活用したり、実践的にトレーニングしたりします。これは、他の教科等での更なる活用にもつながります。

○スキルの活用や実践的なトレーニングにより、「読解力」向上だけでなく、児童・生徒の「確かな学力」の向上、「生きる力」の育成を図ります。

# ２　教科等の学習と新たなフォーマット

## (1) 教科等の学習における「読解力」向上の取組

○すべての教科に必要な基本的な能力の一つである「読解力」の向上は、教科等の目標達成と不可分な関係にあり、相互補完・相乗効果を考慮した取組が必要です。

○ただ、「読解力」向上のための取組を教科等の学習活動に位置付けるに当たっては、教科等の学習目標を明確にした上で、教科等の学習活動と「読解力」との関連を明確にする必要があります。

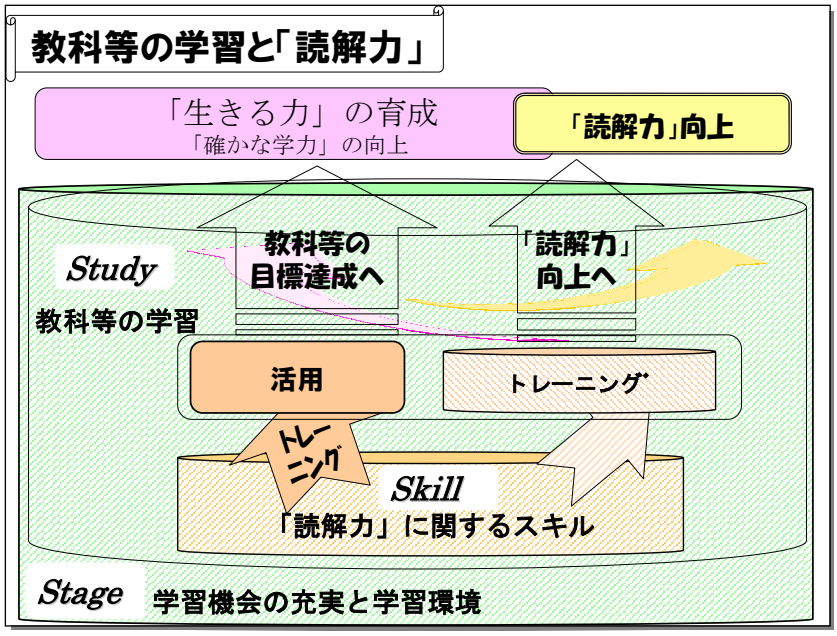
○どの学習活動において、「読解力」のためのどの力とスキルが必要かを考え、学習活動との関連が明確に分かるように計画を立てます。

○あわせて、児童・生徒の実態に応じた学習活動を具体的に実現するための手だてを考えます。

○トレーニングしたスキルを活用することは児童・生徒に安心感をもたらし、難しいと思っていた課題に取り組む意欲につながります。スキルを活用することで、「できた！」「分かった！」という体験をすることは、新たな課題に取り組む意欲や、更なる実践的なトレーニングや新しいスキル活用につながります。

○どのスキルを活用したらよいか分からずにいる児童・生徒には、活用できるスキルを提示したり、ヒントを提示したりするなど、適切な支援をするようにします。

○スキルについては、児童・生徒が自分で選び、活用できるようになることを目指します。そのためにも、トレーニングしたスキルを活用するだけでなく、実際の学習活動の中でトレーニングすることも大切です。




※「新たなフォーマット」については、教科等の学習目標・学習活動と「読解力」との関係を明確に示すために、また紙面の関係上、評価計画及び評価に関する具体的な児童・生徒の姿や手立てについては、掲載していません。各学校で取り組む際には、こうした内容について検討する必要があります。

## (2) 新たなフォーマットの作成

○そこで、「読解力」向上のための取組を学習活動に位置付けるための「新たな学習指導案のフォーマット」（書式）を作成しました。主な特徴は次のとおりです。

①「単元・題材の目標」と並べ、「児童・生徒について」（児童・生徒の現状と課題）を明記。

→ 児童・生徒の現状と課題を併記することは、学習活動の中で必要な「読解力」のための力やスキルを明確にし、児童・生徒に応じたカリキュラム作成につながります。

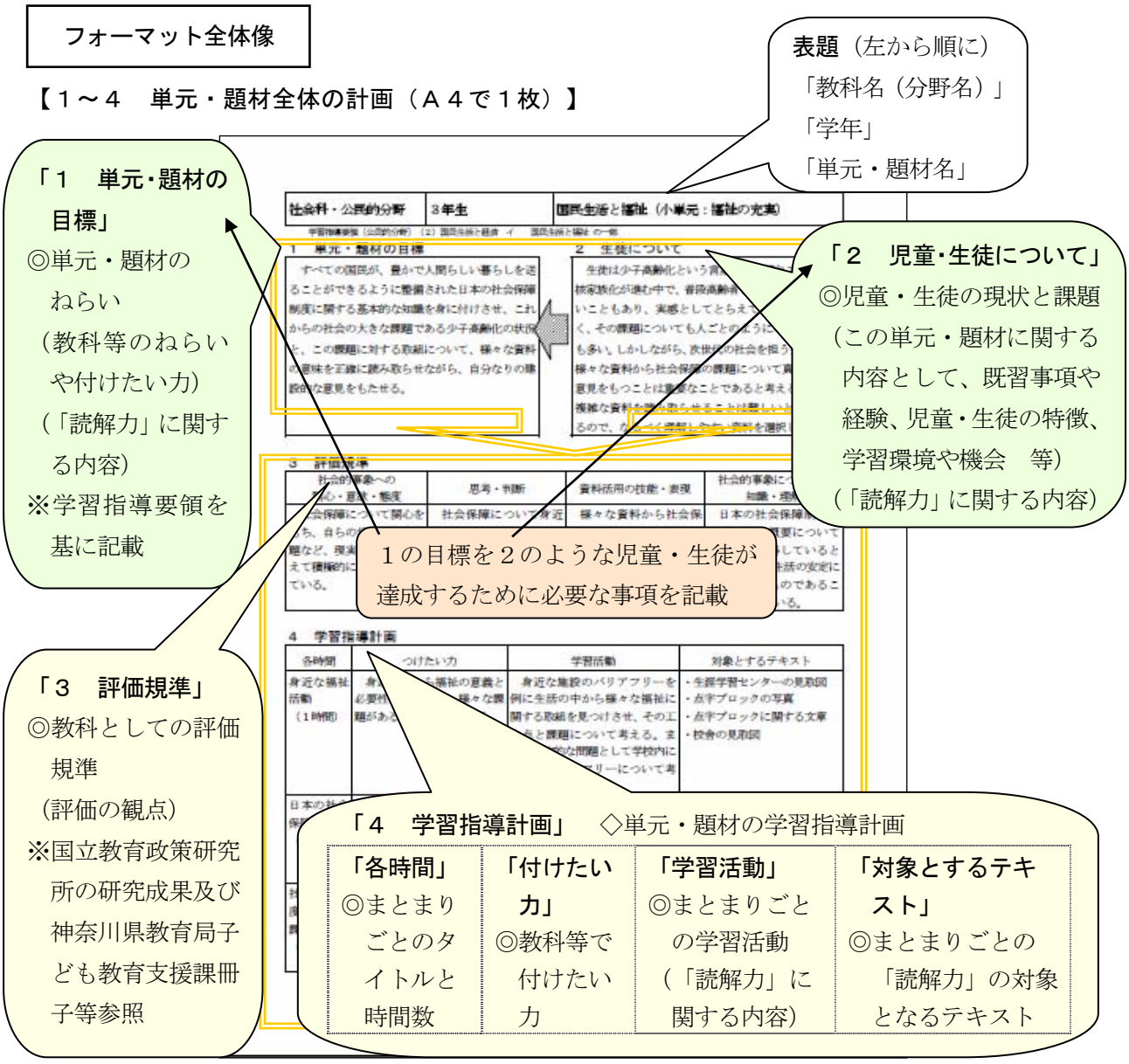
②「授業計画」において、「学習活動」に続いて関連する「読解力」のための「四つの力」及びそのスキルを明記。

→ 「読解力」のための力やそのスキルを明確に位置付けた授業計画を立てることは、具体的な手立てを明確にし、「読解力」の中核となる「考える」活動を取り入れるなど、授業改善につながります。

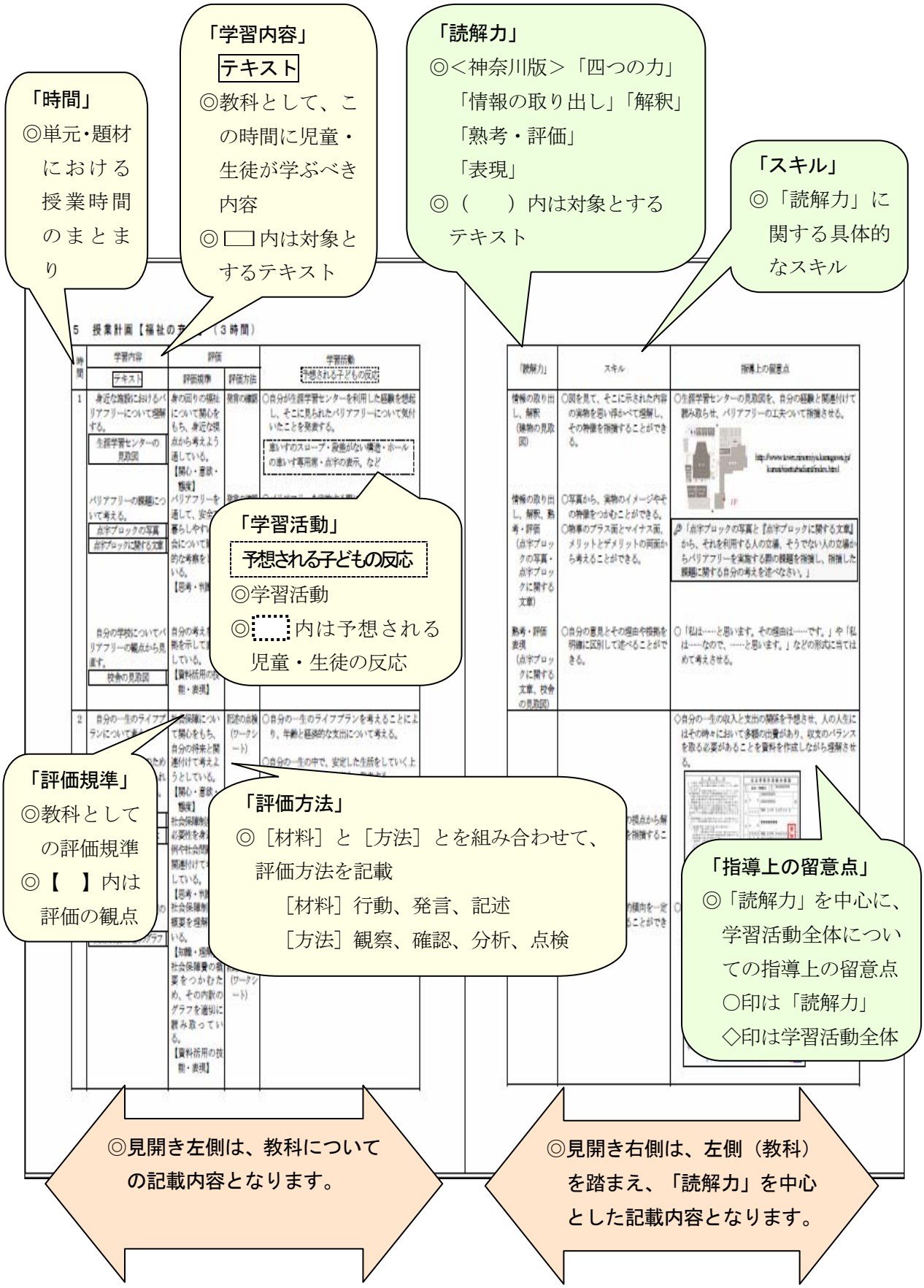
○新たなフォーマットによる学習指導案については、【学習指導案編】で紹介しています。

**フォーマット全体像**

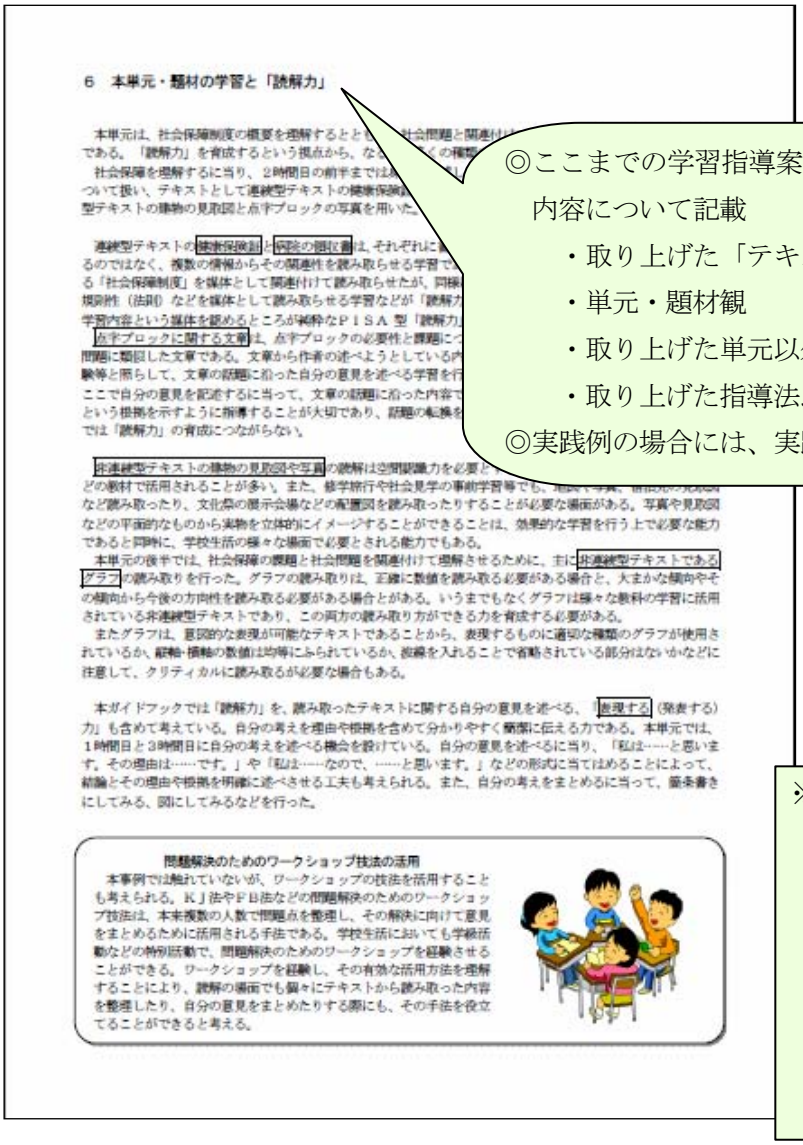
**【１～４　単元・題材全体の計画（Ａ４で１枚）】**



【５　授業計画（Ａ４で２枚：見開き）】



【６　本単元・題材の学習と「読解力」（Ａ４で１枚）】



６　本単元・題材の学習と「読解力」

本単元は、社会保障制度の概要を理解するとと[…]社会問題と関連付[…]である。「読解力」を育成するという視点から、な[…]の種類[…]
社会保障を理解するに当り、２時間目の前半までは[…]ついて扱い、テキストとして連続型テキストの健康保険[…]型テキストの建物の見取図と点字ブロックの写真を用いた。

連続型テキストの健康保険証と保険の個人番[…]るのではなく、複数の情報からその関連性を読み取らせる学習で[…]る「社会保障制度」を媒体として関連付けて読み取らせたが、同様[…]規則性（法則）などを媒体として読み取らせる学習などが「読解力[…]学習内容という媒体を認めるところが純粋なＰＩＳＡ型「読解力」[…]
点字ブロックに関する文章は、点字ブロックの必要性と課題につ[…]問題に類似した文章である。文章から作者の述べようとしている内[…]験等と照らして、文章の話題に沿った自分の意見を述べる学習を行[…]ここで自分の意見を記述するに当って、文章の話題に沿った内容で[…]という根拠を示すように指導することが大切であり、話題の転換を[…]では「読解力」の育成につながらない。

非連続型テキストの建物の見取図や写真の読解は空間認識力を必要と[…]などの教材で活用されることが多い。また、修学旅行や社会見学の事前学習等でも、[…]など読み取ったり、文化祭の展示会場などの配置図を読み取ったりすることが必要な場面がある。写真や見取図などの平面的なものから実物を立体的にイメージすることができることは、効率的な学習を行う上で必要な能力であると同時に、学校生活の様々な場面で必要とされる能力でもある。

本単元の後半では、社会保障の課題と社会問題を関連付けて理解させるために、主に非連続型テキストであるグラフの読み取りを行った。グラフの読み取りは、正確に数値を読み取る必要がある場合と、大まかな傾向やその傾向から今後の方向性を読み取る必要がある場合とがある。いうまでもなくグラフは様々な教科の学習に活用されている非連続型テキストであり、この両方の読み取り方ができる力を育成する必要がある。

またグラフは、意図的な表現が可能なテキストであることから、表現するものに適切な種類のグラフが使用されているか、縦軸・横軸の数値は均等にふられているか、線線を入れることで省略されている部分はないかなどに注意して、クリティカルに読み取るが必要な場合もある。

本ガイドブックでは「読解力」を、読み取ったテキストに関する自分の意見を述べる、表現する（発表する）力」も含めて考えている。自分の考えを理由や根拠を含めて分かりやすく聞衆に伝える力である。本単元では、１時間目と３時間目に自分の考えを述べる機会を設けている。自分の意見を述べるに当り、「私は……と思います。その理由は……です。」や「私は……なので、……と思います。」などの形式に当てはめることによって、結論とその理由や根拠を明確に述べさせる工夫も考えられる。また、自分の考えをまとめるに当って、箇条書きにしてみる、図にしてみるなどを行った。

問題解決のためのワークショップ技法の活用
本事例では触れていないが、ワークショップの技法を活用することも考えられる。ＫＪ法やＰＩ法などの問題解決のためのワークショップ技法は、本来複数の人数で問題点を整理し、その解決に向けて意見をまとめるために活用される手法である。学校生活においても学級活動などの特別活動で、問題解決のためのワークショップを経験させることができる。ワークショップを経験し、その有効な活用方法を理解することにより、読解の場面でも個々にテキストから読み取った内容を整理したり、自分の意見をまとめたりする際にも、その手法を役立てることができると考える。

◎ここまでの学習指導案全体に関して、次のような内容について記載
・取り上げた「テキスト」
・単元・題材観
・取り上げた単元以外にも活用できるスキル
・取り上げた指導法以外の工夫例　　等
◎実践例の場合には、実践結果についても記載

※テキストについては可能な範囲で実際に対象とした図・写真等を掲載
＜掲載場所＞
「５　授業計画」
「６　本単元・題材の学習と『読解力』」

## 第２章－２の２　参考文献


○髙木展郎　「新しい指導案への考え方（小中学校）」
○国立教育政策研究所教育課程研究センター 2002『評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料（小学校）―評価規準，評価方法等の研究開発（報告）― 』
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/houkoku/index_e.htm
○国立教育政策研究所教育課程研究センター 2002『評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料（中学校）―評価規準，評価方法等の研究開発（報告）― 』
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/houkoku/index_jh.htm
○神奈川県教育委員会 平成 18 年 『評価資料集Ⅱ 小学校 ―評価活動の参考資料として― 』
○神奈川県教育委員会 平成 16 年 『評価資料集Ⅱ 中学校 ―評価活動の参考資料として― 』
http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/ed_sien/gakuhyo/siryou02/subjects.htm

# ３　学習機会の充実

## (1) 学習機会の充実

○「読解力」向上のための取組については、各教科や総合的な学習の時間以外に、特別活動や朝の会・帰りの会等の様々な場面で設定することができます。

○特別活動について考えてみると、その中には「読解力」が必要な場面があります。例えば、学級活動、児童会・生徒会活動等では、話し合い活動が行われ、係や委員会などでは調査結果等による掲示物や刊行物の作成などが行われます。

○朝の会・帰りの会では、スピーチなどの活動を取り入れる例が挙げられます。

○このように、特別活動や朝の会・帰りの会の様々な場面に関連して、掲示物を充実させたり、「読解力」に関する活動やスキルトレーニングを取り入れたりする等、計画的・意図的に「読解力」に関する学習機会の充実を図ります。

○スキルトレーニングを行う際には、意識的にスキルを活用できるように工夫するとともに、楽しくできるように工夫することが大切です。意識せずに行うことで身に付かなかったり、つまらないという理由でトレーニングが進まなかったりすることもあります。トレーニングは繰り返し行う必要があるからこそ楽しくできるように、ゲーム形式での活動やレクリエーションとして行うなどの工夫が必要です。楽しく行うことは、児童・生徒の発想を広げ、自らスキルを工夫することにもつながります。

○また、児童・生徒が一人でスキルを活用できるようにするために、教員がやり方を教えた後は、児童・生徒が自分達でトレーニングができるような方法を工夫します。児童・生徒が自分たちでトレーニングをする際には、教員は必要に応じて支援を行います。

○教員間でアイデアを出し合い、自分達でも試してみるなどして、児童・生徒の実態に合ったトレーニング方法を工夫してみましょう。なお、先に挙げたスキルモデルの中には、市販のソフトに雛形（ひな）があったり、作成用ソフトがフリーウェア（無料で使用できるソフトウェア）として配布されていたりするなど、パソコン上で作成できるものもあります。

○学習機会の充実に関して、ここでは「読む」「書く」「聞く」「話す」といった主な行為について具体的な例を挙げて見ていきます。なお、これらの行為は相互に関連しています。

### 1　読む活動

○読む活動としては、環境整備を含めて、次のようなものが挙げられます。

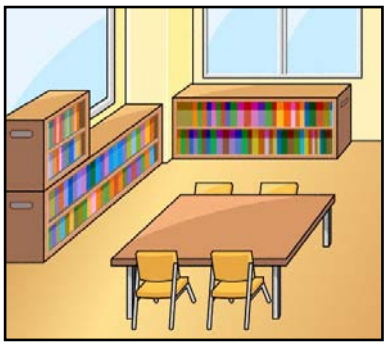
①　読書の機会の確保

「読解力」向上のためには、読書の機会を増やすことが重要です。各学校の実態に合わせ、年間を通して読書の時間を設定したり、読書週間や読書月間として読書する期間を設定したりするなどの取組を行います。

読書は、想像力や考える習慣を身に付け、豊かな感性や思いやりの心をはぐくむことがで

きます。読書をすることのすばらしさを感じ取らせる読む場を設定することが大切です。

② 学校図書館の利用促進



学校全体で考えると読む活動の重要な場所として、学校図書館が挙げられます。利用を促進するために、年度当初の利用の説明会、図書だより等の広報活動を通しての推薦図書や新着図書の紹介等が取組として挙げられます。また、児童・生徒が購入を希望している図書の希望調査をするなどして児童・生徒が自主的･意欲的に学校図書館を活用するように工夫を図ります。また、教科学習や総合的な学習の時間に利用できるように、蔵書の整備もしていく必要があります。

③ 掲示物等での情報提供

教室や廊下の掲示物を充実させることは、読書と同様に読む機会の充実につながります。また、他の児童・生徒の作品を読むことにより、自分の思いや考えと比較したり、自分の持ち合わせない新たなものを吸収したりすることにもつながります。

そのために、教員も学校内の掲示物を意識して読み、朝の会・帰りの会で話題を提供し、読む活動についての情報提供を意図的・計画的に行っていくことが必要です。

○インターネットが普及し、必要な情報を簡単に瞬時に手に入れられるようになりました。そこで、与えられた情報をそのまま信じるのではなく、他のものと比較しながら情報を正しく読むことができるように指導していくことも重要です。

## 2 書く活動

○書く力を育成するためには教科学習だけでなく、様々な場面で取り組むことが必要です。書くことが苦手な児童・生徒には、書くためのスキルを身に付けさせたり、最初は字数が少なくてもよいから書かせたりするなど日々の積み重ねが重要です。また、書かせて終わりではなく、書かれたものについて評価をし、指導・助言することが大切です。

○学級を中心とした書く活動としては次のようなものが挙げられます。

① １分間スピーチの原稿

１分間スピーチで発表する内容について、あらかじめ 400 字詰め原稿用紙一枚に自分の思いや考えをまとめます。発表当日までに学級担任に渡し、学級担任はスピーチの内容やスピーチの仕方について該当児童・生徒へ助言するという方法もあります。

② １分間スピーチへのメッセージカード

友達の意見や考えを聞いて感じた感想や意見をメッセージカードに書き表します。学級担任が確認後、該当児童・生徒に書かれたカードを手渡します。できるだけ理由を書かせるようにします。

| 1分間スピーチ　メッセージカード |
| --- |
| さんのスピーチを聞いて　　番　　氏名 |
| |

聞き手にとっては聞くことと書くこととを関連させるだけでなく、他者理解にもつながります。また、メッセージを受け取った児童・生徒は、話すことを工夫することができるだけでなく、自分が気付いていない面を知るなど自己理解にもつながります。

③　生活プラン表

自分の一日の学校生活を振り返り、今後に向けての感想や考えを簡潔に書きます。また、教科を中心に宿題や提出物等の連絡事項を記入させ、メモを取る習慣を身に付けさせるようにします。

| 生活プラン<br>月　日（ ） | | |
|---|---|---|
| | 教科名 | 連絡事項(準備する物、宿題、提出物　等) |
| 朝の会 | | |
| 1時間目 | | |
| 2時間目 | | |
| 3時間目 | | |
| 4時間目 | | |
| 5時間目 | | |
| 6時間目 | | |
| 帰りの会 | | |
| 一日の反省 | | |

④　学級日誌・日直日誌

日直として学級の一日の出来事を簡潔に書いて報告できるようにさせます。特に学級担任以外の教員が担当する教科等の授業の様子については、学級担任に伝わるように、具体的に書くようにすることで、他者に伝える文章を書く練習にもなります。

⑤　感想文

行事ごとに取組を振り返ったり、朝会の講話、講演会等を聞いたりしたことについて、感想や意見をＡ４一枚程度（1,000 字程度）にまとめて書くようにします。それらを活用して、年度末や卒業時に学校生活の足跡として「自分史新聞」としてまとめることもできます。

## 3　聞く活動

○集中して聞くことができたり、話の内容を正確に聞き取ることができたりするようになるためには、日々の積み重ねが大切です。

○学級においては朝の会・帰りの会が大切な場面になります。教員は児童・生徒が集中して聞くことができるように話し方を工夫したり、伝達事項だけではなく、「今日の出来事」のような話題を取り上げたりするような取組が必要です。

○また、メモを取ったり、聞いたことをまとめたりするなどの方法を取り入れたり、観点を明確にして聞くようにするなどスキルトレーニングを行ったりして、聞く力を高めるようにします。

## 4　話す活動

○話す活動では、話す内容、話し方等を工夫することが必要です。具体的には相手の話を受け、その内容を踏まえて自分の考えや意見を話したり、場面や目的に応じて言葉を選び、敬語などを適切に使ったり、聞き手が聞き取りやすい声量、速さ、声の調子で話したり、大事なところを強調して話したり、間の取り方を工夫して話したりすることなどです。

○学級を中心とした活動としては、「書くこと」と重複しますが、次のような例が挙げられます。

①　１分間スピーチ

自分の思いや考えを学級の全員の前で話す機会となります。

②　日直

朝の会・帰りの会の司会等、すべての児童・生徒が学級全員の前で話す機会となります。

③　特別活動

学級活動、児童会・生徒会活動、学校行事を展開する際に、諸課題を解決するための話し合う活動は多くあります。自分たちの生活と直接的にかかわることであり、話し合いの進め方、合意形成の図り方等を身に付ける良い機会となります。

## (2) 学習環境について

### 1　教室環境

○教室は児童・生徒にとって学習の場であり、一日の大半を過ごす生活の場でもあることから、環境を整えることは非常に大切です。

○教室環境として「読解力」向上の視点からは、掲示物が重要となります。学習に関係する掲示物だけでなく、児童・生徒一人ひとりの良さや個性が学級の中で認められるようなものを掲示したり、読んでみようと思うような見せ方の工夫をしたりします。

○掲示物（内容）としては次のようなものが挙げられます。

・児童・生徒の教科等の学習における作品
・月ごとや学期ごとなど、その時期に合わせ、係活動等を通して作成した掲示物
（多様なテキストとなるよう工夫します。）
・話し合いのルール等の約束事に関する掲示物
・学習に関する情報
（「読解力」に関して、活用したい表現や方法等についても掲示します。）
・身近な話題、児童・生徒に読んだり、考えたりして欲しい話題

○また、掲示物は、児童・生徒が興味・関心を持って読んだり見たりできるように、常に更新することも大切です。また、児童・生徒からの情報発信の場としても活用し、児童・生徒も交えて教室環境を充実させるようにします。

○机や椅子を含め、教室内のものの配置を工夫することも重要です。
（p. 42 に参考文献として挙げた『「考える力」はこうしてつける』が参考になります。）

### 2　教室以外の環境

○「読解力」を向上させる学習環境の充実を学校全体でとらえた場合、教室の掲示物だけではなく廊下等の掲示物も整備することが必要です。例えば、保健安全・健康関係の掲示物は保健室前、図書関係の掲示物は学校図書館前、図画工作・美術の児童・生徒作品は廊下や美術室前というようにコーナーを決め、適宜貼り替えて、読む機会や目にする機会を充実させることが大切です。

○また、夏季休業中に各教科で課題とした児童・生徒作品、絵画コンクールや読書感想文コンクール等の大会で入選した作品を廊下や特別教室に掲示し、自分が所属する学級や学年以外の児童・生徒の作品を見たり、読んだりする機会を充実させるようにします。学校行事の時だけではなく、常時優れた作品を見たり、読んだりすることができる環境づくりは大切なことです。

（pp. 41-42 の写真協力：二宮町立二宮中学校）

## 3　学級経営

○児童・生徒が意欲的に学習に取り組むためには、その集団（学級）の中で居心地の良さを感じたり、落ち着いて生活することができたり、所属意識を持って活動することができたりすることが必要です。そのために教員は日々の学級経営において、「読解力」と関連するものとして次に挙げるようなことに意識して取り組むことが大切です。

・聞くこと、話すことに関する指導を常に意識して行い、聞き方などのルールや話の仕方等を身に付けさせる。

・児童・生徒の話をよく聞いたり、個々の児童・生徒の良さや進歩したことを見付けては、話しかけるようにしたりする。安心して自分の意見が言うことができ、一人ひとりの持ち味が発揮できるような、一人ひとりが認められていると思える学級にする。

・教員と児童・生徒、児童・生徒同士の意見交換が活発に行われるように配慮する。

○学級活動や教科等の学習活動において、話し合い等の様々な活動が行われています。各学級、各教科で教員が個々に取り組むのではなく、学校全体で、計画的に取り組みます。

○そのためには、学級や教科等の学習活動で活用する「話し合いの仕方」等の情報をコンテンツとしてまとめるなどして、いつでも、だれでもがその内容を知ることができる環境づくりが必要です。（右図参照）

（平成 17 年度神奈川県立総合教育センター長期研修員作成）

○また、「読解力」に関する内容として、各学級・各学年・各教科で具体的にどのような活動が実施されているのかを把握できるようにすることが大切です。そのために活動を時系列の一覧表にするなどの工夫も必要です。

### 第２章－２の３　参考文献

○有村久春 2003 『“教職研修”スタートブック Vol. 1 “学級づくり”スタートブック』教育開発研究所
○ジェニ・ウィルソン、レスリー・ウィング・ジャン（吉田新一郎訳） 2004 『「考える力」はこうしてつける』新評論

# 第３章
# 各学校で
# 取り組む際に

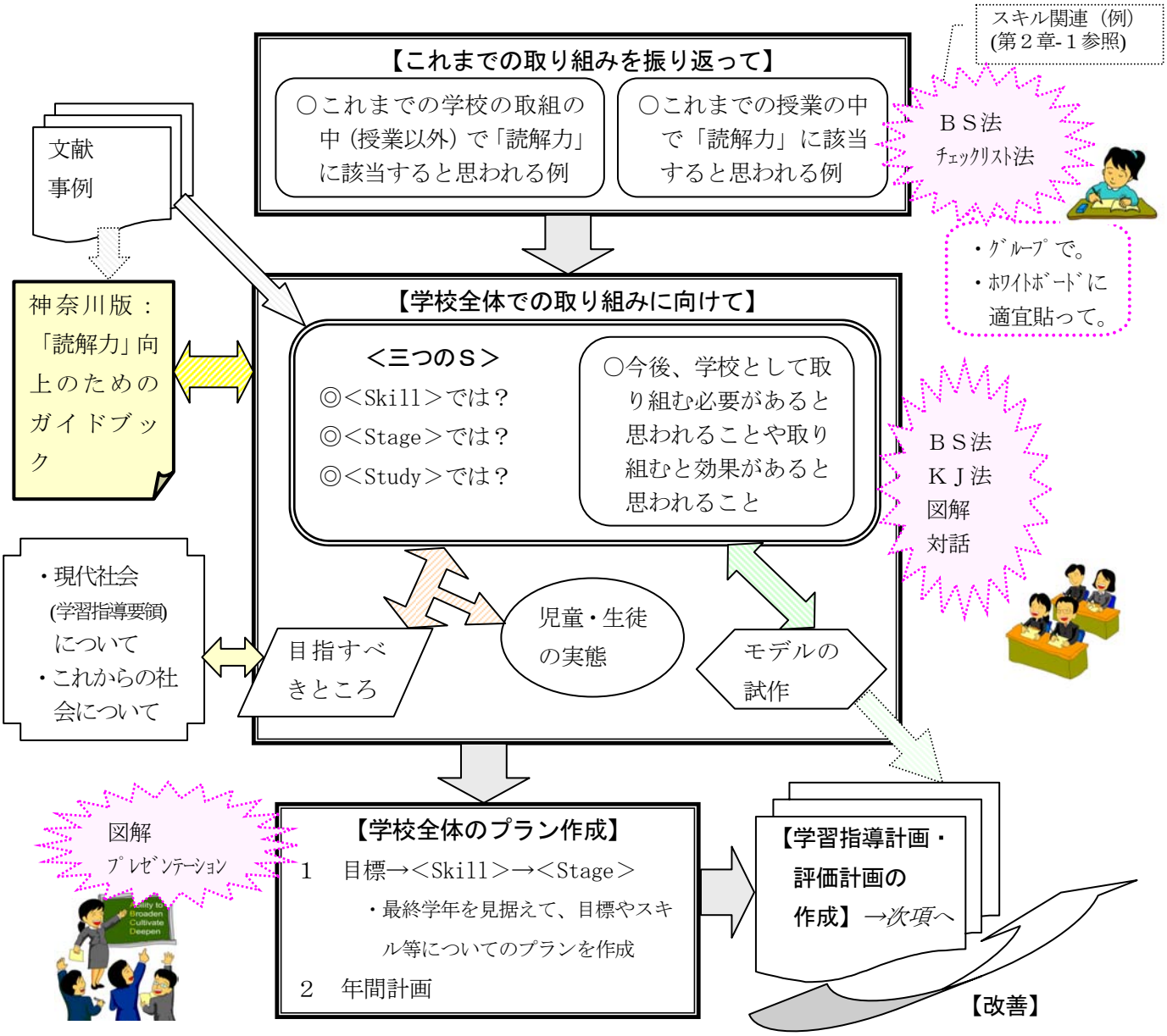
# 第3章

◇**第３章**では、各学校が教育活動全体で、「読解力」向上に取り組むための具体的な手順について説明していきます。また、「読解力」の評価に関する参考資料を掲載しています。

## １　作成の手順

### (1) カリキュラム

○最初に、カリキュラム作成の手順を図で示しました。実際に取り組む際には、各場面に必要な「読解力」に関する力を意識し、スキルを活用しながら、進めてみてください。



## (2) 学習指導計画・評価計画

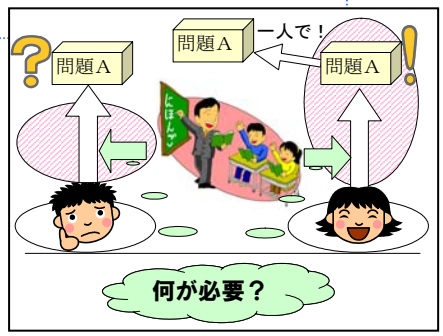
○次に、学校全体のプランに基づき、学習指導計画・評価計画を立てます。
○「読解力」のどの力・どのスキルについて、どの教科等で、いつ活用したり実践的なトレーニングをしたりするかということ、あるいはしたのかということ。こうした点について、教員間で情報を共有するようにします。

○単元・題材の学習指導案については、共通のフォーマットで、児童・生徒の現状と学習のねらいを明確にし、現在の児童・生徒が目標を達成するために必要な事項を明確に記載します。そして、学習活動において、「読解力」のどの力が必要なのか、あるいは伸ばすことが重要なのか、そのためにどのスキルを活用したりトレーニングをしたりすることが必要なのかを明記します。
○評価については、単元・題材の評価規準、具体的な児童・生徒の姿や手立て等を明確にします。
○作成の際には、児童・生徒の現状に合わせ、発達段階に応じた学習活動や支援の方法を考えることが重要です。

**★「発達の最近接領域」★**

○心理学者ヴィゴツキーの理論です。発達には二つの水準があるとしています。
○一つは、子どもが一人で自主的な問題解決ができる水準である「現在の発達水準」です。もう一つは、他人との協同（大人の助けや友達との協力）によって可能となる課題解決の水準である「明日の発達水準」です。後者が「発達の最近接領域」に該当するものです。
○「子どもは、集団活動における模倣によって、大人の指導のもとであるなら、理解をもって自主的にすることのできることよりもはるかに多くのことをすることができ」るとしています。そして、「子どもが今日、大人の助けを受けてできることを、明日」には、「自主的にできるようになる」だろうとしています。（『「発達の最近接領域」の理論』pp. 18-19 ）
○「発達の最近接領域」を意識し、「明日」には児童・生徒が一人で解決ができるようになるために、「集団活動」の中で、教員が適切な支援をするということは大切な観点の一つです。

〔引用・参考文献〕 柴田義松 2006 『ヴィゴツキー入門』子どもの未来社（寺子屋新書）
ヴィゴツキー（土井捷三、神谷栄司訳）2003 『「発達の最近接領域」の理論
―教授・学習過程における子どもの発達 』三学出版




○発達段階に応じた支援の方法として、何を教材・教具とし、どのような授業形態・学習活動で、どのような言葉で説明・質問するのか、といったことを具体的に考えるようにします。
○個々の児童・生徒に応じたスキルを意識することは、具体的な手立てを考えることにもつながります。

○また、学習指導案の精査に当たっては、次の点に留意します。

○クリティカル・リーディング！（良かった所と改善点を具体的に）
○リライト！（簡潔に分かりやすく）

教科を問わず、他の教員の授業を参観することも大切です。

○＜三つのＳ＞を柱とした方法は、各学校で、「読解力」以外の能力等の育成・向上を柱の一つにして、カリキュラム・マネジメントに取り組む際にも応用できるものです。
○カリキュラム・マネジメントについては、当センター刊行物も参考にしてみてください。
「小・中学校の教員のためのより良い学校づくりガイドブック
～カリキュラム・マネジメントの推進～ 」 平成 19 年３月

# ２　「読解力」の評価

○児童・生徒がどの程度「読解力」を身に付けているかということについては、日常の教科等の学習活動において見ることができます。また、教科等の学習目標が達成されたかどうかで見ることができます。どちらにしても、「読解力」を意識して評価を行うことが必要です。
○また、テストにおいて、教科等の学習内容を「読解力」のための「四つの力」で問うことは、「読解力」や「考える力」の評価にもつながります。

○児童・生徒にどの程度「読解力」が身に付いたかということについて、まとまった評価をすることも大切です。
○そのためには、次の点が重要となります。
　①テキスト
　②問いかけ
　③評価

○「読む行為」の三つのプロセスについては、PISA 調査の「習熟度レベル」が参考になります。
○また、作問については、必ずしも紙面によるものとは限りませんが、ここでは「読解力」を意識した紙面による問題の作成について、参考となる資料を紹介します。
○当センターでは、平成 15 年に「学力に関する研究」として、独自に「読解リテラシー」に関する PISA 調査に準拠した調査問題を作成しました。PISA 調査が 15 歳を対象としていることから高等学校を対象としたものではありますが、問題作成の考え方及び作成方法については、小学校・中学校にも共通するものです。
○作問については、特に熟考・評価に関する問題をどのように作成するかが課題となります。あわせて、自由記述についてどのように評価するかということも課題となります。

＜熟考・評価及び自由記述に関する問題における課題（例）＞
1　完全正答とならなかった解答にみられた特徴
①「この文章の内容にふれ」ることなく、問題文の内容に関する自らの考えのみを述べてしまっている。
②「この文章にふれながら」の部分の採点に当たり、文章にふれているか否かについての採点者の判断に揺れが生じている。
2　改善の視点
○問題文を読み、その中から自ら課題を見つけ、それについての自らの考えを述べる力を測る設問とする。そのためには、設問文では問題文の具体的な内容に論及することを避ける必要があること。また、問題文のどの部分（内容）を自らの課題として見つけたのかを明確に答えさせるために、「〈文章に書かれている具体的な内容の指摘〉→〈それに対するあなたの考え〉」という手順で解答させる、いわゆる二段階の設問として改訂。
（平成 15 年度神奈川県立総合教育センター「学力に関する研究（読解リテラシーに関する研究）」報告書より

○この調査問題は、中学校修了時における「読解力」を評価する問題としても活用できます。
［pp. 49-56 に参考資料として、研究の概要、作問の概要及び問題例を掲載。（詳細については、当センターまで）］

# 参考資料

## 【PISA 調査：読解力における習熟度レベルの特徴】

国立教育政策研究所 2004 『PISA 2003 年調査　評価の枠組み』ぎょうせい（pp. 110-111 より）

| | 情報の取り出し | テキストの解釈 | 熟考・評価 |
|---|---|---|---|
| レベル５ | 深く埋め込まれた複雑な情報を見つけ出し、できる限り順序づけたり、結び付けたりすることができる。いくつかの情報は、テキスト本体の外に存在する場合がある。テキストのどの情報が課題に関連しているかを、推論することができる。かなりそれらしい、及び／または広範な対立情報を処理することができる。 | ニュアンスのある言葉の意味を解釈するか、あるいはテキストについての完全で詳細な理解を示すことができる。 | 特殊な知識を使って批判的に評価したり、仮説を立てたりすることができる。予想に反した概念を処理し、長く複雑なテキストに関する深い理解を導き出すことができる。 |
| | 連続型テキスト：テキストの特定の部分が暗示的主題や意図に対して持っている関係性を見分けるために、論述構造が明確または明白に特徴づけられていないテキストをうまく処理することができる。<br>非連続型テキスト：長く詳しい表示物に示された多くの情報の間にあるパターンを特定することができる。場合によっては、表示物の外部にある情報を参考にする。読み手は、テキストの節を完全に理解するためには同一文書の中にある別の部分、例えば脚注を参照する必要があることを別途認識しなければならない。 | | |
| レベル４ | 深く埋め込まれた複数の情報を見つけ出し、できる限り順序づけたり、結び付けたりすることができる。それぞれの情報は、身近な文脈または形式を持つテキストの内部に存在する複合的な基準を満たす必要がある。テキストのどの情報が課題に関連しているかを、推論することができる。 | 見慣れない文脈において分類を理解し、適用するために、及びテキスト全体を考慮しながら、テキストのある節の意味を解釈するために、高いレベルのテキストに基づく推論を行うことができる。曖昧なもの、予想に反するアイディア、及び否定的に表現されるアイディアを処理することができる。 | テキストについて仮説を立てたり、批判的に評価したりするために、形式的または公的な知識を用いることができる。長く複雑なテキストを正確に理解していることを示すことができる。 |
| | 連続型テキスト：埋め込まれている情報を見つけ出し、解釈し、評価するために、あるいは、心理学的、形而上学的意味を推論するために、しばしば明確な論述が特徴づけられていない場合に、いくつかの段落にわたる言葉やテーマの結び付きを理解することができる。<br>非連続型テキスト：しばしば、ラベルや特別な形式といった形成体の助けをほとんど借りないで関連する情報を見つけるために、また、比較されたり、結び付けられているようないくつかの情報を見つけ出すために、長く詳しいテキストを入念に調べることができる。 | | |

| | 情報の取り出し | テキストの解釈 | 熟考・評価 |
|---|---|---|---|
| レベル３ | 複合的な基準を満たす必要のある各情報の間の関係を見つけ出し、場合によっては認識することができる。重要な対立する情報を処理することができる。 | 主要なアイディアを特定し、ある関係性を理解し、単語や語句の意味を解釈するために、テキストのいくつかの部分を統合することができる。多くの基準を考慮に入れた上で比較、対照、分類することができる。対立する情報を処理することができる。 | テキストの特徴を結び付けたり、比較したり、説明したり、評価したりすることができる。身近な日常的知識との関連においてテキストの詳細な理解を示したり、あまり一般的ではない知識を導き出すことができる。 |
| | 連続型テキスト：テキスト編成の慣例がある場合にはこれを用い、また、情報を見つけ出し、解釈し、評価するために、文や段落における因果関係などの暗示的または明示的な論理の結び付きを理解することができる。<br>非連続型テキスト：１つの表示物を、第２の別の文書や表示物、場合によっては異なる形式のものに照らして考察することができる。または、グラフや地図にあるいくつかの空間・言語・数値情報を結び付け、提示された情報についての結論を導き出すことができる。 | | |
| レベル２ | 複合的な基準を満たす必要のある情報を、１つ以上見つけ出すことができる。対立する情報を処理することができる。 | テキストにおける主要なアイディアを特定し、関連性を理解し、簡単な分類を構築したり適用したりし、情報が重要でなく、低いレベルの推論が求められる場合に、テキストの限定的な部分における意味を解釈することができる。 | テキストと外部の知識とを比較したり、結び付けたりすることができる。または、テキストの特徴を、個人の経験や意見から説明することができる。 |
| | 連続型テキスト：情報を見つけ出したり、解釈したりするために、段落内の論理的結び付き及び言葉の結び付きを理解することができる。あるいは、著者の意図を推論するために、テキストをまたがる情報や個々の情報を統合することができる。<br>非連続型テキスト：簡単な樹形図や表など視覚的表現の基本的構造について、理解することができる。または、グラフや表の２つの情報を結び付けることができる。 | | |
| レベル１ | １つ以上の明示的に記述された個々の情報を見つけ出すことができる。この情報は、典型的には１つの基準を満たすもので、テキスト内に対立する情報はほとんど存在しない。 | テキスト内で求められた情報が重要でない場合に、身近な主題に関するテキストにおいて主題または著者の意図を認識することができる。 | テキストにある情報と、一般的で日常的な知識との間の簡単な結び付けを行うことができる。 |
| | 連続型テキスト：テキストの主要なアイディアについての印象を描写したり、テキストの短い節の中で明示的に記述されている情報を見つけ出すために、冗長性や段落の見出し、ありふれた出版物の慣例を用いることができる。<br>非連続型テキスト：直接的な方法では限られた情報しか提供せず、そのほとんどが言語テキストはわずかな単語や文に限定されている簡単な地図、折れ線グラフ、棒グラフなど、通常、単一の表示物において、別個の情報に焦点を当てることができる。 | | |

## 【PISA 調査に準拠した神奈川版調査問題】

平成 15 年度神奈川県立総合教育センター「学力に関する研究（読解リテラシーに関する研究）」報告書より作成

**◆研究の概要◆**

「『新しい学力観』に基づいた『確かな学力』をつけるために必要とされるリテラシーを分析するとともに、リテラシーを測る問題を作成することにより、授業改善やその成果の検証に資する」ことを目的に行われたものです。内容としては、OECD の PISA 調査に準拠した問題作成、採点基準作成、質問紙の作成です。作成した問題については、高等学校において検証調査を行い、結果の集計・分析及び問題の再検討・精査を行い、問題を完成させました、

なお、「OECD－PISA2000 年調査 国立教育政策研究所所内プロジェクト・チーム」において読解力班主査を務めた、有元秀文総括研究官を助言者として研究を進めました。

**◆作問の概要◆**

**１　問題の構成**

(1) 問題と題材

| 問　題　名 | 題　材 |
|---|---|
| A　議会のしごととしくみ | パンフレット |
| B　地球温暖化防止 | 評論文 |
| C　ハイキングコースガイド | 案内文 |
| D　エネルギー | 説明文とグラフ |
| E　「じゃないですか」の新用法 | 評論文 |
| F　りんご | 詩 |

(2) 各問題の内容（設問ごとに上から順に、「プロセス」「タイプ」「状況・目的」）

| | 問１ | 問２ | 問３ | 問４ | 問５ |
|---|---|---|---|---|---|
| A<br>議会のしごととしくみ | 情報の取り出し | 解釈 | 情報の取り出し | 情報の取り出し | 情報の取り出し |
| | 解説 | 解説 | 解説 | 解説 | 解説 |
| | 公共 | 公共 | 公共 | 公共 | 公共 |
| B<br>地球温暖化防止 | 解釈 | 解釈 | 熟考・評価 | | |
| | 叙述 | 叙述 | 叙述 | | |
| | 公共 | 公共 | 公共 | | |
| C<br>ハイキング<br>コースガイド | 解釈 | 情報の取り出し | 情報の取り出し | 情報の取り出し | |
| | 解説 | 解説 | 解説 | 解説 | |
| | 個人 | 個人 | 個人 | 個人 | |
| D<br>エネルギー | 情報の取り出し | 情報の取り出し | 解釈 | 解釈 | |
| | 図 | 図 | 図 | 解説 | |
| | 公共 | 公共 | 公共 | 公共 | |
| E<br>「じゃないですか」の新用法 | 情報の取り出し | 情報の取り出し | 情報の取り出し | 熟考・評価 | |
| | 図 | 叙述 | 叙述 | 叙述 | |
| | 教育 | 教育 | 教育 | 教育 | |
| F<br>りんご | 解釈 | 熟考・評価 | 解釈 | | |
| | 叙述 | 叙述 | 叙述 | | |
| | 個人 | 個人 | 個人 | | |

(3) PISA 調査に準じた分類による作成した問題の数

| プロセス | | 合計 |
|---|---|---|
| 情報の取り出し | 12 | 23 |
| 解釈 | 8 | |
| 熟考・評価 | 3 | |

| タイプ | | 合計 |
|---|---|---|
| 解説 | 10 | 23 |
| 叙述 | 9 | |
| 図 | 4 | |

| 状況・目的 | | 合計 |
|---|---|---|
| 公共 | 12 | 23 |
| 個人 | 7 | |
| 教育 | 4 | |

## 2　問題文（素材）の選択

問題文（素材）の収集及び検討に当たっては、PISA 型「読解力」の考え方に立脚して、四つのカテゴリーを設定し、それらに合致した問題文（素材）を選択しています。いずれのカテゴリーも、「読解(力)」が「生きる(力)」にそのまま結び付く内容となるように設定したものです。

**(1) カテゴリー１：生きることに直接係わるテーマ**

【生命や財産等の保持に直接関連する内容や、合理的な生活を送ることに関する内容】

問題：「ハイキングコースガイド」

ハイキングの案内文と地図とを符合させ、コース（道）を外れることなく、危険な箇所等を把握することで安全なハイキングを行うための、読解力が要求されるという設定となっている。文章（ガイド、案内、地図）等から必要となる情報を的確に読み取り、情報を整理し、自らの判断に基づき、適切な対応（行動）をとれるようにすることが読解の目的である。

このカテゴリーに属するものとして、電気器具や薬品等の取扱説明書、列車や航空機の時刻表、料理のレシピなどが考えられる。

**(2) カテゴリー２：社会に参加することに係わるテーマ**

【社会に参加するための知識や現在の社会問題に関する内容】

問題：「議会のしごととしくみ」「地球温暖化防止」「エネルギー」

「議会のしごととしくみ」は、行政機関の発行したパンフレットから社会参加に必要な知識を読み取るための読解力をみるものである。また、「地球温暖化防止」「エネルギー」は、ともに現在世界規模で起こっている課題の理解、更にそれらの課題を自らの問題として考えるための読解力が問われる内容となっている。

このカテゴリーに属するものとして、行政機関等からの文書や案内、地域での回覧板、また新聞やテレビ等のメディアからの情報、町の掲示物、広告などが考えられる。

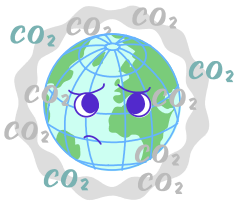
**(3) カテゴリー３：様々な意見や考え方に係わるテーマ**

【社会生活を送る上で、様々な意見や考え方に関する内容】

問題：「『じゃないですか』の新用法」

言葉の使い方に関する評論文を論旨に沿って理解し、自らの知識や経験を踏まえて自分なりの意見を持つための読解力が問われる内容である。あるテーマに対して、ともに社会の構成員である他人の意見や考え方を正確に読み取るとともに、自らの意見を持ち、それを表現することが必要となる場面を想定している。

このカテゴリーに属するものとして、各種の意見文や評論文、随筆、感想文、また新聞やテレビ等のメディアから発信された意見や論説等がある。



**(4) カテゴリー４：読み味わうことで、豊かな心情や生活をつくり出すテーマ**

【随筆や韻文などの文芸的な文章等から、表現の効果や作者の思いを読み取る内容】

問題：「りんご」（詩）

自らの知識や経験を活用して、作品に表現された世界や表現方法等を読み味わうことは、豊かな社会生活を送る上での必要な読解力である。このカテゴリーにおいては、問題文の解釈を一面的に固定してとらえることなく、問題文を主体的に読み味わうことによって、自らの世界を広げていくことを期待している。

詩のほかに、俳句や短歌、随筆や小説や戯曲などの文芸的な文章や、手紙文などもこのカテゴリーに含まれる。

## ３　設問の作成

問題作成の過程では、従来の学校教育で行われているいわゆる教科国語の問題のように、一文や一句の部分解釈に頼ることなく、問題文全体を読むことによって、「読解力」を問う設問を作成するよう留意しています。

また、設問の作成に当たっては、PISA の「読解力」の問題に準拠して、読解のプロセスの「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」を出題の観点として設問の作成を行っています。観点の趣旨は次のとおりです。

**(1) 〔全体の解釈〕問題文の概要を把握する**

文章全体で何を表現しているのかを読み取ることができる能力を測る。

**(2) 〔情報の取り出し〕問題文から特定の情報を取り出す**

問題文が表現しようとしていることを理解する上で、重要な部分や指示された特定の情報を読み取ることができる能力を測る。

**〔内容の解釈〕内容を解釈する**

問題文の中で、その内容を理解する上で重要な部分や、読み取っておく必要のある部分を適切に解釈することができる能力を測る。

**(3) 〔熟考・評価〕問題文を根拠に自らの意見を述べる**

問題文に書かれていることについて、その内容にふれながら、自分の考えを述べることができる能力を測る。なお、自分の考えを述べるに当たっては、問題文の内容を具体的に指摘し、その内容に係わる意見を自らの言葉で述べる能力が必要としている。

さらに、次の点を設問作成上の留意点として作業を進めた。

○問題文には下線や空欄などを施すことなく、問題文全体や必要な部分から読み取らせるような工夫をすること。

読解リテラシーは、「生徒がそれぞれ持つ知識や経験をもとに」読解する力を測るものであり、社会生活を営む上で目にする文章などには、意図的に設けられた下線や空欄は存在しないのが普通である。

○解答に当たっては、問題文を読むことのみで解答が可能となる設問であること。

専門的な内容を扱った問題文であっても、一般的常識とされる事項以外の、解答者の既成の知識の有無が解答を導き出すための主たる要因となるような設問は不適切である。読解リテラシーにおいては、知識（量）を問うのではなく、知識や経験をもとに、社会生活を送る上での「生きる力」としての読解力を問うための問題でなければならない。

◆問題例◆

## 問題Ａ　議会のしごととしくみ

＜議会のしごと＞

**議　決**

議会に与えられた仕事の中で最も重要なもので、条例の制定・改正・廃止、予算の決定、金額の多い契約を結ぶことなど、県政の重要な事項について議決します。

**選挙と同意**

議会の議長、副議長のほか、選挙管理委員などを選挙します。また、副知事、出納長（すいとう）、教育委員など重要な地位に就く人を知事が選任・任命する場合には、議会の同意が必要です。

**検査と調査**

県の仕事が議会で決めたとおり正しく行われているかどうか、事務の内容を検査・調査したり、必要がある場合には、関係のある人の証言や記録の提出を求めたりします。

**請願（せいがん）・陳情（ちんじょう）の審査**

議会に提出された請願や陳情をいろいろな観点から審査して、その内容が県政や県民にとって適当と認められるときは採択・了承します。請願・陳情とは、県民が県行政などに対する意見や要望を提出することです。

**意見書の提出・決議**

県民の福祉や利益になることなどについて、国会や行政機関に意見書を提出したり、議会の意思を明らかにするために決議を行ったりします。

**定例会と臨時会**

県議会には定期的に開かれる「定例会」と必要に応じて開かれる「臨時会」があり、いずれも知事が招集します。定例会は年４回（２月、６月、９月、12 月）開かれ、県政の方針、予算などの重要な事項について審議します。

臨時会は、必要がある場合に開かれ、例年５月に常任委員会の委員の選任などのために開催されます。

＜議会のしくみ＞

| | |
|---|---|
| 本　会　議 | 全議員で構成する会議を「本会議」といいます。議会に提出されたすべての議案などに対する議会としての最終的な意思を決定します。 |
| 議会運営委員会 | 議会を円滑に運営するために設けられています。議会の運営、会議規則や委員会条例に関することなどを協議・審査します。 |
| 常任委員会・特別委員会 | 本会議の議決に先立ち、専門的かつ詳細に審査する場を委員会といいます。「常任委員会」は常時設置している委員会で、本会議から送付された議案や請願・陳情などを審査・調査します。「特別委員会」は、特定の事柄について審査・調査するために必要があるときに設けられます。なお、一般会計などの決算を審査するための「決算特別委員会」があります。 |
| 予算委員会 | 予算関係議案などを多角的に審査するため、２月定例会中に開催されます。なお、特別の事情がある場合には、他の定例会においても開催することがあります。 |

**前のページの資料は、＜議会のしごと＞と＜議会のしくみ＞について説明したものです。この資料を読んで、問１～５に答えてください。**

**議会のしごととしくみに関する問１**

＜議会のしごと＞のうち、「条例の制定・改正・廃止、予算の決定、金額の多い契約を結ぶこと」は、何と呼ばれている仕事ですか。次のうちから一つ選んでください。

A　検査と調査
B　選挙と同意
C　意見書の提出・決議
D　議決
E　請願・陳情の審査

問１の解答

**議会のしごととしくみに関する問２**

＜議会のしくみ＞では、どのようなことについて説明されていますか。次のうちから一つ選んでください。

A　請願や陳情、意見書の提出や決議の方法などについて
B　会議や委員会の種類とそれぞれのはたらきなどについて
C　本会議から常任委員会、特別委員会と続く会議の手順などについて
D　常任委員会や特別委員会などの具体的な構成員などについて

問２の解答

**議会のしごととしくみに関する問３**

常任委員会の委員の選任などのために開催される議会名を答えてください。

問３の解答

**議会のしごととしくみに関する問４**

一般会計などの決算を審査する委員会名を答えてください。

問４の解答

**議会のしごととしくみに関する問５**

知事が選任・任命する場合に、議会の同意が必要とされている役職は何ですか。資料の中から、役職名をすべて答えてください。

問５の解答

## 問題Ｃ　ハイキングコースガイド

大石山（1475m）

大石山は高森山脈南部に位置する標高 1475mの山である。首都圏からも近く、アプローチも容易なため、年間を通じて訪れる人が多い。この山の北部は鬱蒼（うっそう）とした針葉樹の原生林に覆われ、天狗（てんぐ）岳に続く尾根が北に延びている。山の南斜面は、ブナ、カエデを中心とした広葉樹の美しい森林が広がっている。登山道は、大石山の南を通る平川鉄道の浅井駅からのものや、北東の小田集落からのものなどがあるが、ここでは、浅井駅から登り大島温泉に下山する一般的なコースを紹介する。

平川鉄道浅井駅から登山口の北原までは、休日にはバスの便があるが、それ以外は約３㎞の車道を歩くことになる。北原には店が１軒あり、飲み物などを売っている。下山路で大島沢を渡るところまで水を得られないので、必ずここで水を補給しておく。さて、登山届を出して、集落の一番上にある神社の横から登山道に入る。最初は展望のきかないヒノキの植林の中を単調に登って行くと、小さな平地に出る。ベンチがあり、一休みしたくなる所だ。ここは矢場と呼ばれる場所で大石山から南にのびる尾根の末端にあたり、浅井方面の展望が開けている。ここからは尾根の上の登りとなる。展望はあまりきかないが、まばらな樹間を渡る風が心地よい。樹林にブナが見られるようになると前沢山は近い。この頂上は、ブナ林の美しい場所である。東からの道が合流する。ここから大石山山頂までは、１時間ほどだが、吹きさらしの急な登りが続くため、荒天のときは、ここから潔く引き返すことをお勧めする。

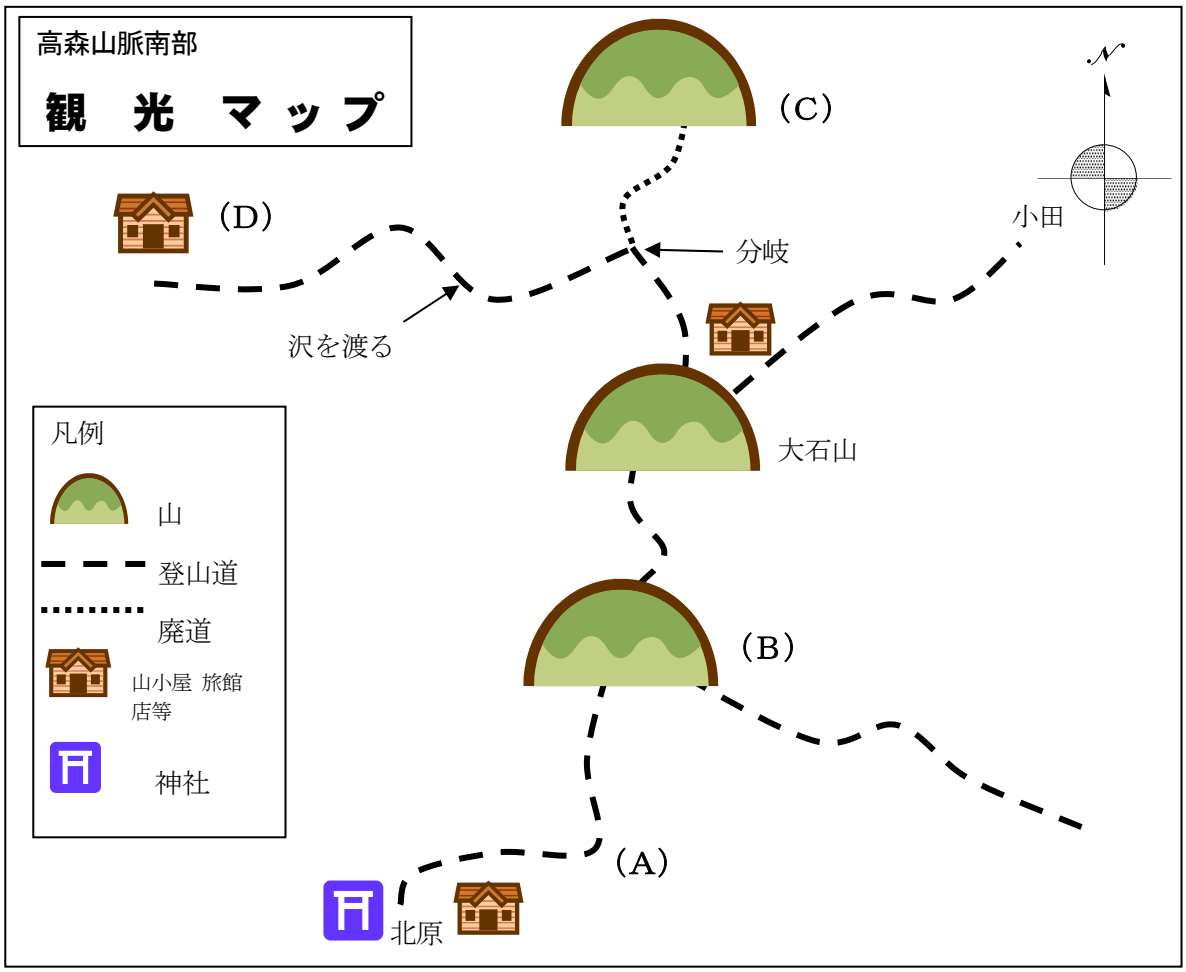
前沢山からは、赤土の急斜面の下りとなり、雨の後など、ぬかるんで実に歩きにくい。以前は草原の道だったのだが、登山者の増加により、草原が踏み荒らされ、幅の広い赤茶けた斜面になってしまった。下りついた所からは、いよいよ潅木（かんぼく）と岩の混じった急な登りとなる。このあたりには立ち枯れたブナの巨木が目につく。かつての美しいブナ林はこの 10 年ほどで見る影もなくなってしまった。この原因については、専門家の調査により酸性雨が関係していることが明らかになってきた。さて、苦しい登りが続くが、次第に展望は開け、西には遠く富士山も望まれる。１時間ほどの登りの後、大石山山頂の一角に飛び出す。山頂からは 360 度の展望が開け、急な登りが報われる。山頂の北側には大石山荘が建っている。

山頂で展望を楽しんだら大島温泉への下山路をたどる。大島温泉へのルートは、いったん天狗岳に続く尾根道を北にたどり、途中から大島沢源流部に下る。大石山山頂からの下りは慎重を期したい。岩の混じった急な下りとなっているからだ。特に雨の日など滑りやすいので注意が必要である。急な下りを終えると、モミやコメツガなどの針葉樹が目立つようになる。さらに 30 分ほど進むと大島温泉への分岐となる。ここを左に折れて大島沢源流部へと下る。なお、現在、天狗岳方面への道は廃道となっており、倒木も多く、道もさだかではない。熟達者以外は絶対に入ってはいけない。過去に遭難騒ぎも起きている。さて、大島温泉へは、大島沢源流の急な下りからはじまる。やがて沢の音が聞こえるようになると傾斜は緩くなる。右手に大島沢の流れが見えるようになると、間もなく沢の岸にでる。橋があるので、橋を渡って向こう岸に行く。ここからはナラやクヌギなどの広葉樹林の道となり、やがて自動車道路に出る。この単調な自動車道路を歩き続けると、右手に大島温泉の建物が見えてくる。ここから浅井駅行きのバスが出ている。大島温泉は素朴な山の湯のたたずまいを残しており、時間があれば温泉で山の汗を流して帰ることをお勧めする。

前のページの文章は、あるハイキングコースの案内文です。この文章を読んで、問１～４に答えてください。

ハイキングコースガイドに関する問１

「天狗岳」「前沢山」「矢場」「大島温泉」は、それぞれ下の観光マップの（A）～（D）のどれにあたりますか。




問１の解答

| | | | |
|---|---|---|---|
| （A） | （B） | （C） | （D） |

**ハイキングコースガイドに関する問２**

このハイキングコース中で、ブナ林の観察を行うとすれば、どこが適当ですか。次のうちから一つ選んでください。

A　北原から矢場までの間
B　矢場から前沢山までの間
C　大石山頂から大島温泉分岐までの間
D　大島沢から大島温泉までの間

問２の解答

**ハイキングコースガイドに関する問３**

この案内文によると、コース中、転倒や転落の危険の大きい箇所はどこですか。次のうちから一つ選んでください。

A　矢場から前沢山まで
B　大石山山頂からの下り
C　大島温泉への分岐点
D　大島沢の橋

問３の解答

**ハイキングコースガイドに関する問４**

大石山周辺では、自然環境上、問題となる現象が二つ発生しています。案内文では、それぞれの現象と原因が何であると書かれていますか。簡潔に書いてください。

問４の解答

---

---

---

# 学習指導案編

◆教科等の学習については、CD－ROM に収録◆

1　「教科等の学習と『読解力』」

　　目標・ねらいと「読解力」との関連及び対象とするテキスト等についての解説

2　各教科等の学習指導案（掲載教科等は次のとおりです。）

　＜小学校＞「国語」「社会」「算数」「理科」「生活」「音楽」「図画工作」
　「家庭」「体育」「総合的な学習の時間」

　＜中学校＞「国語」「社会」「数学」「理科」「音楽」「美術」「保健体育」
　「技術・家庭(技術)」「技術・家庭(家庭)」「外国語(英語)」
　「総合的な学習の時間」

※例として、中学校社会を掲載しています。

・解説「中学校社会科の学習と『読解力』」

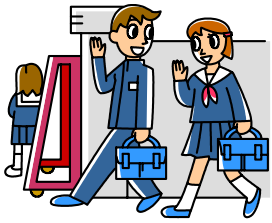
・学習指導案「社会科・公民的分野　３年生　国民生活と福祉（小単元：福祉の充実）」

【小学校】（本冊子添付 CD－ROM 収録内容）

| No. | 教科等 | 学年 | 単元・題材名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 国語 | １・２年生 | かんじたままにことばであらわそう |
| 2 | | ２年生 | 詩（し）のリズムを楽しもう |
| 3 | | ３年生 | しょうかいしたいことを整理して話そう |
| 4 | | ３年生 | 話の中心をとらえよう |
| 5 | | ５年生 | 生き方を見つめて読もう（比べて読もう） |
| 6 | 社会 | ３年生 | 学校のまわり |
| 7 | | ４年生 | ヨコハマ G30 ～きれいな町をめざして～ |
| 8 | | ５年生 | これからの食料生産とわたしたち |
| 9 | | ６年生 | 開国から世界の中へ（黒船来航と開国） |
| 10 | 算数 | ２年生 | かけ算のしき |
| 11 | | ３年生 | 形 |
| 12 | | ６年生 | 単位量あたりの大きさ |
| 13 | 理科 | ４年生 | とじこめた空気や水をおしてみよう |
| 14 | | ５年生 | 流れる水のはたらき |
| 15 | | ６年生 | 水溶液の性質 |
| 16 | 生活 | ２年生 | 生きものとなかよし |
| 17 | 音楽 | ２年生 | イメージを音でひょうげんしよう |
| 18 | 図画工作 | ５年生 | 水面をみつめよう |
| 19 | 家庭 | ５年生 | ミシンを使って、はちまきを作ろう |
| 20 | 体育 | ６年生 | タッチフットボール |
| 21 | | ６年生 | 器械運動「マット運動」 |
| 22 | 総合的な学習の時間 | ５年生 | 食育「コンビニ弁当をプロデュース！」 |

【中学校】（本冊子添付 CD―ROM 収録内容）

| No. | 教科等 | 学年 | 単元・題材名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 国語 | １年生 | 視野を広げる（説明的な文章） |
| 2 | | １年生 | 随筆「アイスキャンデー売り」 |
| 3 | | １年生 | 様々な情報を読む |
| 4 | | ３年生 | 説明文「メディア社会を生きる」 |
| 5 | | ３年生 | 古典「和歌の世界」 |
| 6 | | ３年生 | 情報の送り手の意図を探る |
| 7 | 社会 | １年生 | 中世の日本（武士の台頭と武家社会の展開） |
| 8 | | ２年生 | 自然環境から見た日本の地形的特色 |
| 9 | | ２年生 | 資源や産業から見た日本の地域的特色 |
| 10 | | ２年生 | 近現代の日本と世界　(欧米のアジア進出) |
| 11 | | ３年生 | 国民生活と福祉　(福祉の充実) |
| 12 | 数学 | １年生 | 一次方程式の利用 |
| 13 | | ２年生 | 一次関数の利用 |
| 14 | | ２年生 | 二等辺三角形の性質 |
| 15 | | ３年生 | 二次方程式の利用 |
| 16 | | ３年生 | ２乗に比例する関数 |
| 17 | 理科 | １年生 | 光と音（凸レンズの働き） |
| 18 | | １年生 | 身の回りの物質　水溶液 |
| 19 | | １年生 | 植物の生活と種類 |
| 20 | | ２年生 | 空気中の水蒸気 |
| 21 | | ３年生 | 天体の１日の動きと地球の運動 |
| 22 | 音楽 | ２年生 | イメージして表現しよう |
| 23 | | ３年生 | 能楽を味わおう |
| 24 | 美術 | ２年生 | 一版多色版画（作品を分析的にみて制作にいかす） |
| 25 | | ３年生 | 言葉から発想する抽象絵画 |
| 26 | 保健体育 | ２年生 | 陸上競技「走り幅跳び」 |
| 27 | | ２年生 | 球技「バレーボール」 |
| 28 | | ３年生 | 健康な生活と疾病の予防　(生活習慣病とその予防) |
| 29 | 技術・家庭(技術) | １年生 | 生活に役立つものづくり |
| 30 | | ２年生 | 製作品の構想を具体化しよう |
| 31 | 技術・家庭(家庭) | １年生 | 食品の選び方を考えよう |
| 32 | | ２年生 | 幼児の健全な発達について考えよう |
| 33 | 外国語（英語） | １年生 | 友だちの家を探そう |
| 34 | | １年生 | Unit４　Guessing Game |
| 35 | | ２年生 | Let's Read and Talk |
| 36 | | ２年生 | DO IT LISTEN 6 アンケート |
| 37 | | ３年生 | 身近な話題を生かしたテキストの利用 |
| 38 | 総合的な学習の時間 | １～３年生 | 現地調査や取材でお世話になった方にお礼状を書く |



# 中学校社会科の学習と「読解力」

## 【中学校社会科の教科目標と「読解力」】

中学校社会科においては、学習を進める上で幅広い「読解力」を身に付けることが望まれる。学習指導要領の教科の目標は「広い視野に立って，社会に対する関心を高め，諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し，我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め，公民としての基礎的教養を培い，国際社会に生きる民主的，平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」である。この目標に沿って中学校社会科における「読解力」について見てみる。

ここでは「諸資料に基づいて」考察することが目標を達成するための方法として示されており、「諸資料」は、PISA 型「読解力」のテキストに相当する。社会科の学習においては、そのテキストに何が書いてあるのか、なぜそのテキストが書かれたのかということに加えて、他の情報や既に学習した内容と結び付けてそのテキストに書かれていることにはどのような意味があるのかということも読み取ったり、解釈したり、評価したりしなければならない。PISA 型「読解力」が教科の専門的知識を前提としないところと異なる点である。

また、「公民的資質」には「適切に表現する能力と態度」が含まれる。「諸資料に基づいて」得られた情報を、他の情報と関連付けながら熟考・評価し、話題となっていることについて根拠を示して自分の意見を述べることに加えて、その内容を分かりやすく伝える工夫をすることも「公民的資質の基礎を養う」上で重要な学習である。説明の構成を工夫する、図にして示すなど、伝える力も「読解力」の一部として考えたい。

## 【中学校社会科におけるテキスト】

ところで、中学校社会科で扱われる「諸資料」には、地理的分野では、地誌や紀行文などの連続型テキストに加え、地図やグラフなどの非連続型テキストも多く、地図から必要なことを読む力やグラフからその正確な数値や傾向を読み取るなど、非連続型テキストの「読解力」が地理的な見方や考え方を養う上で重要である。また、写真も地理的分野では理解を深めるためによく活用される教材である。歴史的分野や公民的分野でも、文字史料・法令・新聞記事などの連続型テキストのほかに、絵巻物・歴史地図・グラフなどの非連続型テキストや、歴史的遺産の写真などが学習に活用される。時には、より視覚的に表現するための絵グラフ・地図グラフなど複合的な非連続型テキストが使われることもある。このように社会科では多様な非連続型テキストが活用されることが多い。

そこで、「読解力」という視点からの中学校社会科の学習における「テキスト」のとらえ方として、ここではPISA 型「読解力」よりも広く考え、PISA 型「読解力」の連続型・非連続型テキストに次の二つを加えて考えることにする。

一つは「実物資料」である。例えば地理的分野では「観察や調査などの活動」を行うことになっており、観察や調査の場所で目的にあった情報を収集する必要がある。また、地図で読み取った内容と実際の現地とを結び付けるためには、その場がどのような場所であるのかという情報を必要とする。歴史的分野でも、「博物館，郷土資料館などの見学・調査」を行うことがあり、縄文土器の模様のように展示物から文字になっていない情報を得て学習することもある。これらのことから、「実物資料」も中学校社会科においては、その学習過程において読解の対象となるものであると判断した。

もう一つは、「映像・音声資料」である。学習内容をより理解しやすくするために、写真資料を使うことは一般的になり、情報化社会の進展により、多くのマルチメディア素材が入手しやすくなったことで、歴史的映像や音声資料を教材として活用することができるようになった。臨場感あふれる当時の映像や音声から情報を得て、解釈することは効果的な学習である。また、公民的分野ではニュース映像が読解の対象になることもある。ニュース番組から事実を伝える部分と論評の部分を判断できることは重要であるし、同時に流される映像・音声・文字情報から必要な情報を得て、他の情報と関連付けて自分の意見をもつことも、現代に生きる国民の「公民的資質の基礎を養う」学習として必要である。特に公民的分野ではクリティカルに読む力が必要とされるが、映像・音声資料にも同様のことがいえることから、「映像・音声資料」も学習の過程で読解が必要な対象であると判断した。

## 【中学校社会科における学習指導案（例）】

このように、「読解力」自体はPISA 型のとらえ方を踏襲しつつも、既に学習した内容と関連付けて熟考・評価したり、伝える力も「読解力」の一部であると考えること、読解の対象とするテキストの範囲を学習の過程において扱われる教材に沿って広くとらえることとし、地理・歴史・公民的分野のそれぞれの指導事例を示す。

| 社会科・公民的分野 | ３年生 | 国民生活と福祉（小単元：福祉の充実） |
|---|---|---|

学習指導要領〔公民的分野〕（2）国民生活と経済　イ　　国民生活と福祉 の一部

## １　単元・題材の目標

すべての国民が、豊かで人間らしい暮らしを送ることができるように整備された日本の社会保障制度に関する基本的な知識を身に付けさせ、これからの社会の大きな課題である少子高齢化の状況と、この課題に対する取組について、様々な資料の意味を正確に読み取らせながら、自分なりの建設的な意見をもたせる。

## ２　生徒について

生徒は少子高齢化という言葉は聞き慣れているが、核家族化が進む中で、普段高齢者と接する機会が少ないこともあり、実感としてとらえている生徒は少なく、その課題についても人ごとのように考えている者も多い。しかしながら、次世代の社会を担う生徒達が、様々な資料から社会保障の課題について真剣に考え意見をもつことは重要なことであると考える。生徒に複雑な資料を読み取らせることは難しいと考えられるので、なるべく理解しやすい資料を選択した。

## ３　評価規準

| 社会的事象への関心・意欲・態度 | 思考・判断 | 資料活用の技能・表現 | 社会的事象についての知識・理解 |
|---|---|---|---|
| 社会保障について関心をもち、自らの将来や社会問題など、現実の課題を踏まえて積極的に考えようとしている。 | 社会保障について身近な例を通してその必要性を考え、今後の社会問題と関連付けて建設的に考察している。 | 様々な資料から社会保障の課題について読み取ることができ、資料に基づいた自分の考えを分かりやすく表現している。 | 日本の社会保障制度の現状やその概要についての知識を修得しているとともに、国民生活の安定に欠かせないものであることを理解している。 |

## ４　学習指導計画

| 各時間 | 付けたい力 | 学習活動 | 対象とするテキスト |
|---|---|---|---|
| 身近な福祉活動（１時間） | 身近な例から福祉の意義と必要性を理解させ、様々な課題があることに気付かせる。 | 身近な施設のバリアフリーを例に生活の中から様々な福祉に関する取組を見付けさせ、その工夫点と課題について考える。また、具体的な問題として学校内におけるバリアフリーについて考える。<br>**【情報の取り出し】【解釈】**<br>**【熟考･評価】【表現】** | ・生涯学習センターの見取図<br>・点字ブロックの写真<br>・点字ブロックに関する文章<br>・校舎の見取図 |
| 日本の社会保障制度（１時間） | 国民の健康で安定した生活を守るための、日本の社会保障制度の四つの柱の概要を理解させる。 | 人生のライフサイクルにおいて直面する様々な困難に対して、生活の安定を図るため、社会保障制度が機能していることを理解する。<br>**【情報の取り出し】【解釈】** | ・健康保険証の見本<br>・病院の領収書の見本<br>・社会保障費の内訳のグラフ |
| 社会保障制度の今後の課題（１時間） | 深刻になりつつある少子高齢化社会の課題を、様々な資料から具体的にとらえさせ、建設的な考えをもたせる。 | 先進国の中でも最も少子化・高齢化が進むと考えられる我が国の社会保障の在り方や財源の問題について、資料を基に具体的な意見をもつ。<br>**【情報の取り出し】【解釈】**<br>**【熟考･評価】【表現】** | ・神奈川県の人口予測のグラフ<br>・神奈川県の年齢３区分別人口割合の推移のグラフ<br>・神奈川県内市町村の地方債残高の推移の表 |

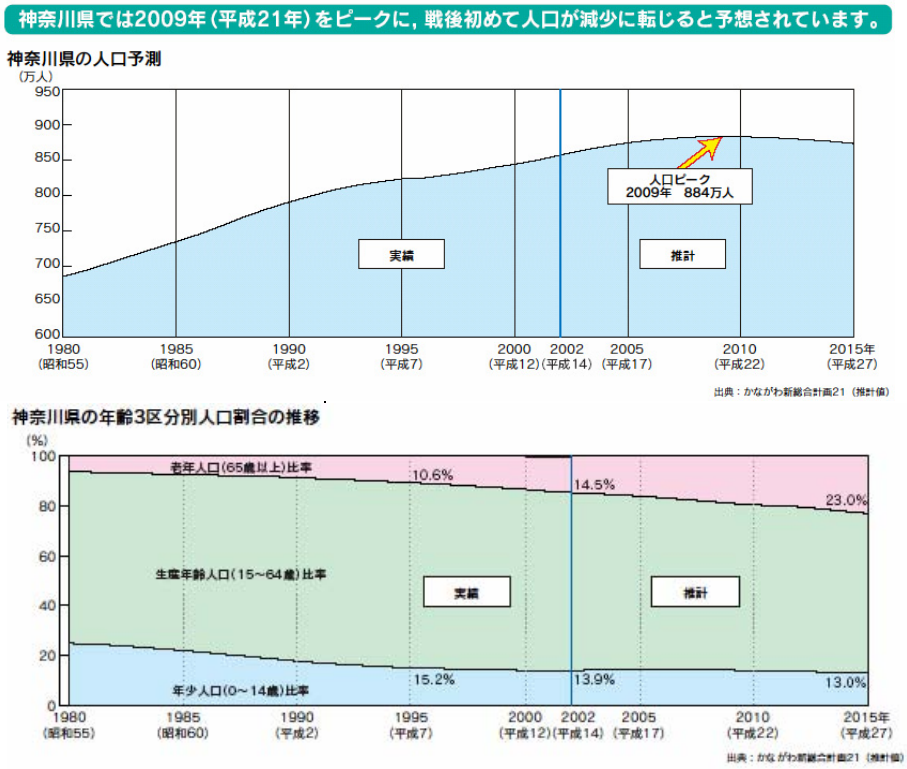
## ５　授業計画【福祉の充実】（３時間）

| 時間 | 学習内容<br>テキスト | 評価<br>評価規準 | 評価<br>評価方法 | 学習活動<br>予想される子どもの反応 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 身近な施設におけるバリアフリーについて理解する。<br>生涯学習センターの見取図 | 身の回りの福祉について関心をもち、身近な視点から考えようとしている。【関心・意欲・態度】 | 発言の確認 | ○自分が生涯学習センターを利用した経験を想起し、そこに見られたバリアフリーについて気付いたことを発表する。<br>車いすのスロープ・段差がない構造・ホールの車いす専用席・点字の表示　など |
| | バリアフリーの課題について考える。<br>点字ブロックの写真<br>点字ブロックに関する文章 | バリアフリーを通して、安全で暮らしやすい社会について建設的な考察をしている。【思考・判断】 | 発言の確認 | ○バリアフリーを実施する際に、問題となることについて考える。<br>点字ブロックは滑りやすい・段差を全くなくすと視覚障害者にとって危険　など |
| | 自分の学校についてバリアフリーの観点から見直す。<br>校舎の見取図 | 自分の考えを根拠を示して表現している。【資料活用の技能・表現】 | 記述の分析 | ○バリアフリーの観点から、自分の学校を見直し、改良すべき点について具体的に指摘し、自分なりの工夫点をワークシートにまとめ、発表する。 |
| 2 | 自分の一生のライフプランについて考える。 | | | ○自分の一生のライフプランを考えることにより、年齢と経済的な支出について考える。 |
| | 人の一生の安定のために社会保障制度が作られていることを理解する。 | | | ○自分の一生の中で、安定した生活をしていく上で不安なことは何かを考え、発表する。<br>失業・自然災害・事故・老後　など |
| | 健康保険証の見本<br>病院の領収書の見本 | 社会保障制度の必要性を身近な例や社会問題と関連付けて考察している。【思考・判断】 | 発言の確認 | ○健康保険証と病院の領収書を例に、身近にある社会保障制度に気付き、その必要性を理解する。 |
| | 日本の社会保障制度の概要を理解する。<br>社会保障費の内訳のグラフ | 社会保障制度の概要を理解している。【知識・理解】 | 記述の確認 | ○社会保障費の内訳のグラフから社会保障の四本柱を理解し、社会保障費の概要や特色、社会保障制度の課題を把握する。（ワークシート） |
| | | 社会保障費の概要をつかむため、その内訳のグラフを適切に読み取っている。【資料活用の技能・表現】 | 記述の確認 | |

| 「読解力」 | スキル | 指導上の留意点 |
|---|---|---|
| 情報の取り出し、解釈<br>（生涯学習センターの見取図） | ○図を見て、そこに示された内容の実物を思い浮かべて理解し、その特徴を指摘することができる。 | ○生涯学習センターの見取図を、自分の経験と関連付けて読み取らせ、バリアフリーの工夫ついて指摘させる。<br> <br>二宮町役場<br>http://www.town.ninomiya.kanagawa.jp/kurasi/sisetu/radiant/index.html |
| 情報の取り出し、解釈、熟考・評価<br>（点字ブロックの写真・点字ブロックに関する文章） | ○写真から、実物のイメージやその特徴をつかむことができる。<br>○物事のプラス面とマイナス面、メリットとデメリットの両面から考えることができる。 | 「点字ブロックの写真と『点字ブロックに関する文章』から、それを利用する人の立場、そうでない人の立場からバリアフリーを実施する際の課題を指摘し、指摘した課題に関する自分の考えを述べなさい。」 |
| 熟考・評価表現<br>（点字ブロックに関する文章、校舎の見取図） | ○自分の意見とその理由や根拠を明確に区別して述べることができる。 | ○「私は……と思います。その理由は……です。」や「私は……なので、……と思います。」などの形式に当てはめて考えさせる。 |
| 解釈<br>（健康保険証の見本と病院の領収書の見本） | ○複数の情報を一つの視点から解釈し、その関連性を指摘することができる。 | ◇自分の一生の収入と支出の関係を予想させ、人の人生にはその時々において多額の出費があり、収支のバランスを取る必要があることを資料を作成しながら理解させる。<br> |
| 情報の取り出し、解釈<br>（社会保障費の内訳のグラフ） | ○グラフが示す特徴的傾向を一定の視点から指摘することができる。 | ○社会保障費の内訳は、社会保険費が最も多く、８割近くにものぼり、社会保障費を圧迫していることに気付かせる。<br> |

| 時間 | 学習内容<br>テキスト | 評価<br>評価規準 | 評価<br>評価方法 | 学習活動<br>予想される子どもの反応 |
|---|---|---|---|---|
| 3 | 神奈川県の人口について現状を知り、今後の推移を考える。<br>神奈川県の人口予測のグラフ | グラフから正確な数値や、おおよその傾向を読み取り、ワークシートに適切に記述している。<br>【技能・表現】 | 発言の確認 | ○グラフから神奈川県のおおよその人口と、今後の人口予想を読み取る。<br>870万を超える人々が住んでいる。<br>2009年にはピークを迎えてそれ以降は減少傾向にある。 |
| | 神奈川県の高齢者人口の割合について、予想される傾向を考える。<br>神奈川県の年齢３区分別人口割合の推移のグラフ | | 記述の確認 | ○現在と10年後の65歳以上の高齢者の割合を予想し比較する。<br>○グラフから正確な数値を読み取る。<br>現在はおよそ、14.5%。<br>2015年（平成27年）には23%（およそ４人に１人が高齢者となる）。<br>○神奈川県の人口を100人とした場合の、高齢者と生産年齢人口の割合を計算する。<br>現在：生産年齢人口74人・高齢者11人。<br>10年後：生産年齢人口64人・高齢者23人。 |
| | 高齢者が増加することで、保健・医療・福祉の費用の増大が予想されることに気付く。 | | | ○高齢者一人を支える場合、10年後の生産年齢人口の負担はどのくらい増えるか、具体的な数値で考える。（単純に高齢者一人あたり年間10万円かかると仮定して計算する。）<br>現在：11人×10万÷74人＝約14865円<br>10年後：23人×10万÷64人＝約35938円<br>35938÷14865＝約2.41<br>単純計算においても約2.5倍近くになる。 |
| | 今後の高齢化社会に向けて、具体的な対応策について自分の考えをもつ。<br>神奈川県内市町村の地方債残高の推移の表 | 高齢化社会における社会保障について、予測される状況を踏まえて、具体的対応策の考察をしている。<br>【思考・判断】 | 記述の分析 | ○表から市町村の負債も年々増加していく傾向をつかみ、高齢者への福祉や医療の質を下げずに、課題を解決するにはどのような手立てをとったら良いか、自分の考えをワークシートに記述し、発表する。<br>定年を延長し、高齢者の仕事を確保する。<br>税金を上げる（公平な税制を考える）。<br>ボランティアを活発にする。 |
| | | 社会保障について関心をもち、自分の将来と関連付けて考えようとしている。<br>【関心・意欲・態度】 | 記述の点検 | |

| 「読解力」 | スキル | 指導上の留意点 |
|---|---|---|
| 情報の取り出し、解釈<br>(神奈川県の人口予測のグラフ、・神奈川県の人口推移のグラフ) | ○グラフから正確に数値を読み取ることができる。<br>○グラフが示す特徴的傾向を指摘することができる。 | ○それぞれのグラフの表現の特徴を思い出させる。<br>○具体的数値に注目させたり、全体的な傾向に注目させたりすることにより、広い視野でグラフを見ることができるようにさせる。 |
| 熟考・評価<br>(本時に参照した各グラフや表) | ○複数の情報を総合して一定の視点から判断し、判断した条件や判断結果を踏まえて、自分の考えをもつことができる。 | ○自分の考えをまとめるに当って、箇条書きにしてみる、図にしてみるなど、考えを整理する工夫をさせる。<br>「財政状況が逼迫する中、高齢者への福祉や医療の質を維持するために、どのような手立てを取ったらよいと思いますか。今日の授業で見たグラフや表のいずれかを基にして、あなたの考えを述べなさい。」 |
| 表現<br>(本時に参照した各グラフや表) | ○発表する内容に応じて、自分の考えを分かりやすく伝える工夫ができる。 | ○自分の考えと前提となる条件(各グラフが示しているものから導き出された社会保障の課題)との関係を簡潔に示せるようにさせる。 |




http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/sityoson/kouiki/shosassi/p03-p07.pdf

## ６　本単元の学習と「読解力」

本単元は、社会保障制度の概要を理解するとともに、社会問題と関連付けてその課題を考える学習をする単元である。「読解力」を育成するという視点から、なるべく多くの種類のテキストを取り入れた。

社会保障を理解するに当り、２時間目の前半までは身近で実感しやすい建物のバリアフリー構造や健康保険について扱い、テキストとして連続型テキストの健康保険証と病院の領収書、点字ブロックに関する文章、非連続型テキストの建物の見取図と点字ブロックの写真を用いた。

連続型テキストの健康保険証と病院の領収書は、それぞれに書かれた内容から詳細な情報を取り出して検討するのではなく、複数の情報からその関連性を読み取らせる学習である。ここでは二つの文字情報を学習内容である「社会保障制度」を媒体として関連付けて読み取らせたが、同様に、理科の実験の解説文と実験結果について、規則性（法則）などを媒体として読み取らせる学習などが「読解力」の育成につながる。こうした学習内容という媒体を認めるところが純粋なPISA 型「読解力」と異なる点である。

点字ブロックに関する文章は、点字ブロックの必要性と課題について書かれた文章で、PISA 型「読解力」問題に類似した文章である。文章から作者の述べようとしている内容とその理由を把握し、自分のもつ知識・経験等と照らして、文章の話題に沿った自分の意見を述べる学習を行う。「読解力」の育成という視点に立つとき、自分の意見を記述させるに当って、文章の話題に沿った内容であること、なぜそのような意見をもったのかという根拠を示すように指導することが大切であり、話題の転換を行ったり、単なる感想を記述したりするだけでは「読解力」の育成につながらない。

非連続型テキストの建物の見取図や写真の読解は空間認識力を必要とする。写真は各教科の教科書や副教材などの教材で活用されることが多い。また、修学旅行や社会見学の事前学習等でも、地図や写真、宿泊先の見取図など読み取ったり、文化祭の展示会場などの配置図を読み取ったりすることが必要な場面がある。写真や見取図などの平面的なものから実物を立体的にイメージすることができることは、効果的な学習を行う上で必要な能力であると同時に、学校生活の様々な場面で必要とされる能力でもある。

本単元の後半では、社会保障の課題と社会問題を関連付けて理解させるために、主に非連続型テキストであるグラフの読み取りを行った。グラフの読み取りは、正確に数値を読み取る必要がある場合と、大まかな傾向やその傾向から今後の方向性を読み取る必要がある場合とがある。いうまでもなくグラフは様々な教科の学習に活用されている非連続型テキストであり、この両方の読み取り方ができる力を育成する必要がある。

またグラフは、意図的な表現が可能なテキストであることから、表現するものに適切な種類のグラフが使用されているか、縦軸･横軸の数値は均等にふられているか、波線を入れることで省略されている部分はないかなどに注意して、クリティカルに読み取ることが必要な場合もある。

本ガイドフックでは「読解力」を、読み取ったテキストに関する自分の意見を述べる、「表現する（発表する）力」も含めて考えている。自分の考えを理由や根拠を含めて分かりやすく簡潔に伝える力である。本単元では、１時間目と３時間目に自分の考えを述べる機会を設けている。自分の意見を述べるにあたり、「私は……と思います。その理由は……です。」や「私は……なので、……と思います。」などの形式に当てはめることによって、結論とその理由や根拠を明確に述べさせる工夫をしてもよい。また、自分の考えを述べるに当って、箇条書きにしてみる、図にしてみるなど、考えをまとめるための工夫をさせた。

**問題解決のためのワークショップ技法の活用**

本事例では触れていないが、ワークショップの技法を「読解力」の育成に活用することも考えられる。ＫＪ法やＦＢ法などの問題解決のためのワークショップ技法は、本来複数の人数で問題点を整理し、その解決に向けて意見をまとめるために活用される手法である。学校生活においても学級活動などの特別活動で、問題解決のためのワークショップを経験させることができる。ワークショップを経験し、その有効な活用方法を理解することにより、テキストを読解する際に、個々にテキストから読み取った内容を整理したり、自分の意見をまとめたりすることに、その手法を役立てることもできる。

『神奈川版：「読解力」向上のためのガイドブック』の作成関係者

＜助言者＞

| 所　　属 | 職　名 | 氏　名 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 横浜国立大学 | 教　授 | 髙木　展郎 | |
| 横浜国立大学 | 教　授 | 高木　まさき | |
| 横浜国立大学 | 教　授 | 森本　信也 | |
| 横浜国立大学 | 助教授 | 池田　敏和 | |

＜調査研究協力員＞

| 所　　属 | 職　名 | 氏　名 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 藤野町立南小学校 | 教　諭 | 篠原　潤子 | 小学校国語 |
| 平塚市立金目小学校 | 教　諭 | 小川　義明 | 小学校国語 |
| 小田原市立前羽小学校 | 総括教諭 | 小菅　克己 | 小学校国語 |
| 鎌倉市立深沢小学校 | 教　諭 | 吉澤　浩之 | 小学校社会 |
| 座間市立相模が丘小学校 | 総括教諭 | 有山　周一 | 小学校社会 |
| 厚木市立飯山小学校 | 教　諭 | 金子　達郎 | 小学校社会 |
| 藤沢市立鵠沼小学校 | 教　諭 | 田中　摂 | 小学校算数 |
| 三浦市立岬陽小学校 | 教　諭 | 飯塚　啓介 | 小学校算数 |
| 藤沢市立石川小学校 | 教　諭 | 黒田　邦寿 | 小学校理科 |
| 伊勢原市立石田小学校 | 教　諭 | 武松　将勝 | 小学校理科 |
| 海老名市立大谷中学校 | 教　諭 | 齋藤　昌代 | 中学校国語 |
| 綾瀬市立綾北中学校 | 教　諭 | 鈴木　久美子 | 中学校国語 |
| 松田町立松田中学校 | 教　諭 | 岩田　総和 | 中学校国語 |
| 座間市立西中学校 | 教　諭 | 宮﨑　広孝 | 中学校社会 |
| 二宮町立二宮西中学校 | 教　諭 | 松本　雅志 | 中学校社会 |
| 厚木市立玉川中学校 | 教　諭 | 佐々木規雄 | 中学校社会 |
| 鎌倉市立第二中学校 | 教　諭 | 太田　洋 | 中学校数学 |
| 大和市立大和中学校 | 教　諭 | 北本　哲夫 | 中学校数学 |
| 綾瀬市立北の台中学校 | 教　諭 | 福本　洋一 | 中学校数学 |
| 寒川町立寒川東中学校 | 教　諭 | 小貫　雅明 | 中学校理科 |
| 平塚市立金目中学校 | 教　諭 | 関谷　育雄 | 中学校理科 |
| 小田原市立千代中学校 | 教　諭 | 谷　　圭司 | 中学校理科 |
| 藤沢市立片瀬中学校 | 教　諭 | 小嶋　丈典 | 中学校外国語（英語） |
| 鎌倉市立第一中学校 | 教　諭 | 堀　　美佐恵 | 中学校外国語（英語） |
| 秦野市立南が丘中学校 | 教　諭 | 草山　明美 | 中学校外国語（英語） |
| 神奈川県立体育センター | 研修指導主事 | 小野澤克己 | 小学校体育 |
| 神奈川県立体育センター | 研修指導主事 | 江守　哲也 | 中学校保健体育 |

＜研究協力機関＞

| 所　　属 | 代表者、関係者氏名 |
|---|---|
| 横浜国立大学<br>教育人間科学部附属<br>横浜小学校 | 校　　長　　森本　信也　　副校長　　赤松　理<br>研究主任　　高橋　明久（理科）<br>教科等：井手　次郎（国語）、増田　格人（社会）、森　勇介（算数） |
| 横浜国立大学<br>教育人間科学部附属<br>鎌倉小学校 | 校　　長　　高橋　和子　　副校長　　細谷　毅義<br>研究推進委員長　清水　美智誉<br>教科等：松岡　由紀（国語）、徳田　えりか（生活）<br>高島　洋子（音楽）、髙松　智行（図画工作）<br>深沢　恵子（家庭）、佐藤　隆之（体育）<br>池上　慎吾（総合的な学習の時間） |
| 横浜国立大学<br>教育人間科学部附属<br>横浜中学校 | 校　　長　　髙木　展郎　　副校長　　岩間　正則<br>研究主任　　本田　清　（社会）<br>教科等：松田　裕行（国語）、松田　哲治（国語）、大谷　一（数学）<br>田中　保樹（理科）、杉山　利行（音楽）、三浦　匡（美術）<br>末岡　洋一（保健体育）、朝比奈　忍（技術・家庭〔技術〕）<br>西岡　正江（技術・家庭〔家庭〕）、平間　貴志（外国語〔英語〕） |

| | |
|---|---|
| 横浜国立大学<br>教育人間科学部附属<br>鎌倉中学校 | 校　　長　　小林　範夫　　副校長　　中田　朝夫<br>研究主任　　大音師　右至（国語、総合的な学習の時間）<br>教科等：吉村　尚記（社会）、山﨑　眞人（社会）、小日向　真（数学）<br>加瀬　良一（理科）、岡部　厚子（音楽）、太田　景子（美術）<br>小野寺　啓司（保健体育）、尾﨑　誠（技術・家庭〔技術〕）<br>岡本　由希子（技術・家庭〔家庭〕）、郷　志帆（外国語〔英語〕） |
| 教育局子ども教育支援課 | |

＜神奈川県立総合教育センター＞

| 所　　属 | 職　名 | 氏　名 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| カリキュラム支援課 | 課　　長 | 米澤　利明 | |
| カリキュラム支援課 | 研修指導主事 | 吉田　佳恵 | 小学校・中学校全総括担当<br>中学校国語 |
| カリキュラム支援課 | 研修指導主事 | 清水　広 | 中学校総括担当、中学校：数学、保健体育、総合的な学習の時間 |
| カリキュラム支援課 | 研修指導主事 | 三堀　仁 | 小学校総括担当、小学校：生活、体育、総合的な学習の時間 |
| 専門研修課 | 研修指導主事 | 渋川　隆男 | 小学校図画工作、中学校美術 |
| 専門研修課 | 研修指導主事 | 石塚　英雄 | 中学校技術・家庭（技術） |
| 専門研修課 | 研修指導主事 | 穂坂　明範 | 小学校理科 |
| 専門研修課 | 研修指導主事 | 平林　隆行 | 中学校理科 |
| 専門研修課 | 研修指導主事 | 佐々木ゆう子 | 小学校家庭、中学校技術・家庭（家庭） |
| 専門研修課 | 研修指導主事 | 古山　好 | 小学校音楽、中学校音楽 |
| カリキュラム支援課 | 研修指導主事 | 猪熊　直樹 | 小学校算数 |
| カリキュラム支援課 | 研修指導主事 | 高柳　俊彦 | 小学校社会 |
| カリキュラム支援課 | 研修指導主事 | 水野　治 | 中学校社会 |
| カリキュラム支援課 | 研修指導主事 | 山近　佐知子 | 小学校国語 |
| カリキュラム支援課 | 研修指導主事 | 阿部　一也 | 中学校外国語(英語) |
| カリキュラム支援課 | 研修指導主事 | 本多　由佳里 | 小学校国語 |
| カリキュラム支援課 | 教育指導専門員 | 長倉　英之 | 小学校・中学校国語 |
| カリキュラム支援課 | 教育指導専門員 | 栁　　正巳 | 中学校外国語（英語） |
| カリキュラム支援課 | 教育指導専門員 | 山崎　裕二 | 中学校国語 |
| カリキュラム支援課 | 教育指導専門員 | 吉村　健二 | 中学校数学 |

※　所属・職名は、本研究参加時のものです。


神奈川版：「読解力」向上のためのガイドブック

発　行　　平成 19 年３月

発行者　　田邊　克彦

発行所　　神奈川県立総合教育センター

〒251-0871　藤沢市善行７－１－１

電話　(0466)81-1659（カリキュラム支援課　直通）

古紙配合率100%再生紙を使用しています

神奈川県

**神奈川県立総合教育センター**

カリキュラムセンター（善行庁舎）
〒251-0871 藤沢市善行 7-1-1
TEL (0466)81-0188
FAX (0466)84-2040

教育相談センター（亀井野庁舎）
〒252-0813 藤沢市亀井野 2547-4
TEL (0466)81-8521
FAX (0466)83-4500

ホームページ　http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/